HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	W.B.イェイツとアイルランド・ナショナリズム
著者	川上，武志; KAWAKAMI，Takeshi
引用	年報新人文学(8): 172(80)-251(1)
発行日	2011-12-22

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

W.B.イェイツとアイルランド・ナショナリズム

川上 武志

はじめに

アイリシュ海の波頭の向こうに浮かび、古には聖人・学者の島とも讃えられたアイルランドの不運は、ブリテン本島との地理的位置に起因するのかもしれない。スコットランドの対岸に挟まれたノース海峡が最短の地点でその距離二十キロあまり、ウェールズのセント・ジョージ海峡からでも約五十キロという距離であるから、昔の帆船でも一夜ほどで辿り着くことができる近さである。ヘンリー２世の不興を買っていたために、新天地への野望を抱いていたアングロ・ノルマンの元伯爵ストロングボウ（Strongbow）ことリチャード・フィッギルバート・ド・クレア（Richard fitz Gilbert de Clare）が、1170年の夏に千数百の手勢と共にウォーターフォードの近くの海岸に上陸するのには、後者のコースが使われた。これが英国によるアイルランド進攻の始まりである。爾来、およそ六世紀に渡って英国によるアイルランドの土地収奪と植民の歴史が繰り返され、「ウィリアム王戦争」（Williamite War, 1689–91）が終わって

みると、アイルランドのカトリック所有地は十数パーセント、しかもそのほとんどがコノハトとクレアという不毛な地域に限られるという有様となる。数多く上げられる「アイルランド問題」の中核となる土地と権力（支配）を巡る闘争の基がここにある。

アイルランドで生まれるか居住しているイギリス人の血を引く家系のものは、一般にアングロ・アイリシュと呼ばれる。チューダー朝まではゲール系アイルランド人とアングロ・アイリシュとの土地を巡る抗争が展開されていたのではあるが、アングロ・アイリシュはゲール系アイルランド人との通婚などによって次第にアイルランド化していき、なかには「アイランド人以上にアイルランド的」といわれるものさえ現れる。チューダー朝におけるヘンリー８世の宗教改革と強大国スペインとの競合と確執という国際関係が、イギリスのアイルランド政策を急転させた。というのも、イギリス内外の敵対者がチューダー王朝に敵意行為を起こす重要な拠点として、アイルランドを利用することを断念させるために、アイルランドを征服し支配する必要に迫られたからである。プロテスタント国になったイギリスの安全を守る意図のもとにおいて、1541年にアイルランド議会においてヘンリー王が、アイルランド国王であると宣言される。しかしこの政策への不満は、アイルランドのゲール領主の一連の騒擾を引き起こし、エリザベスの治世の末期になって、遂にアルスターの宗主を名乗るヒュー・オニール（Hugh O'Neill）の反乱となって噴出した。スペイン軍が援軍として1601年キンセールに到着するが、オニールと彼のアルスター、コナハト、マンスターの同盟軍はイギリス軍の猛将マウントジョイ（C. B. Mountjoy）との戦に破れ、オニールの降伏をもって「九年戦争」（Nine Years War, 1593–1603）は終結する。その四年後、イギリスの権力に服従することを嫌うオニールを筆頭

とするアルスターのゲール領主と家臣九十余名が大陸へと旅立っていく。「伯爵の逃亡」（Flight of Earls）と名づけられるこの出来事は、ゲール首長制のみならず古いゲール世界そのものの終焉を意味していた。ゲール指導者がいなくなったことに喜んだイギリスは早速植民（Ulster plantation）に取り掛かるのであるが、それはプロテスタント移民の手によるものであった。彼等はそれ以前のアングロ・アイリシュの植民者であるオールド・イングリッシュに対してニュー・イングリッシュと呼ばれることになるが、このさき先住者でありカトリックのアングロ・アイリッシュの弱体化が進行していくのは当然の帰結となる。続いて、イギリス内乱（「清教徒革命」）に乗じたカトリックの連合戦争（Confederate War, 1641–53）が起こるが、この報復のために企てられたクロムウェルのアイルランド遠征と、それに伴う土地の没収などによってプロテスタント上層社会が形成される。十七世紀に生じたこれらの一連の経過が、アイルランドの土地所有の状態をカトリック教徒からプロテスタントに一変させてしまう。ウィリアム王戦争によって新国王のオレンジ公ウィリアムによって追われたジェイムズ２世が、アイルランドに落ち延びてくる。そのジェイムズに土地問題とカトリック教会の制度確立を期待したカトリック・アイルランドは、またもや一敗地に塗れる。結果、カトリックに待ち受けていたのは過酷な新刑法（「カトリック刑罰法」（penal laws）であったが、その後の一世紀に渡るプロテスタント支配（プロテスタント・アセンダンシー：Protestant ascendancy）の時代が到来することになる。

フランス革命を経験した十九世紀のヨーロッパ、大陸の各地に吹き荒れるナショナリズムの嵐は、アイルランドではカトリック解放の運動として、続いて1801年に施行されたイギリスとの「合同法」（Act of

Union）の撤回運動となって到来した。また、この世紀の中頃には、本来は保守的であるアイルランドのナショナリズムが、武力によってイギリスからの分離・独立を獲得しようと意気込むナショナリズムの過激派となって、その姿をみせることにもなる。そして遂に、アイルランドのナショナリズムは、カトリックの土地回復の闘争（「土地戦争」Land War, 1879–82）としてその頂点を迎えるのである。

多くの研究者が同意していることに、ナショナリズムの動きは特定の過程を経るというものがある。要約すると、最初は全く政治的な関連を持たない素朴な民族的・文化的な遺産のようなものがある。次にそれを酵母のように用いる文人（知識人）達が顕在化して、最終的に民衆の賛助を受ける大規模なナショナリズムの運動へと、その発酵を手助けしていくというものである。いみじくも、ナショナリズムは文学者の発明品だと喝破したのは、ナショナリズム研究の学徒 E. ケドゥーリーであった(1)。アイルランドにおいてはこの役割を勤めるのが、プロテスタント・アセンダンシー階級に属する者ということになるのであるが、十九世紀末に、イェイツが主導した「アイルランド文芸復興」（Irish Literary Revival）の潮は、これらの者達の手によって掻き立てられた、ナショナリズムの最後の奔流のようなものであった。本稿は、ナショナリズムに揺れるアイルランドにおいて、文芸復興の運動を推進するイェイツのアセンダンシーとしての立場を、その著作を中心として検討していくものである。さらに、ナショナリズム一般の諸相を踏まえたうえで、アイルランドのナショナリズムの歴史が見せる様々な局面との関係を交えながら考察していくことにする。

1. アイルランド文芸復興とS. J. オグレイディ

イェイツのアベイ座創設（1904年）によって本格化した演劇活動は、アイルランドにおける文芸復興の精華となって開花する。この大輪を育んだ温床に目を転ずると、S. J. オグレイディ（Standish James O'Grady）の『アイルランドの歴史：英雄時代』（*History of Ireland : Heroic Period,* 1878）というロマン的な幻想に溢れる土壌を見出すことができる。かつてイェイツは、アイルランド文芸復興運動はオグレイディの『アイルランドの歴史』の上梓をもって始まると語ったことがある。アイルランド国教会の牧師の子息として、コークに生まれたオグレイディは、父親の後を追って「トリニティ・カレッジ」（Trinity College）に学んだあと、こんどはその意に反して法曹界に身を投じようと決心していた。丁度そんな矢先に、たまたま訪れていた田舎の屋敷で雨に見舞われ、仕方なくそこの図書室で過ごすことになる。書架を漁っているうちに偶然手にしたS. オハロラン（Sylvester O'Halloran）の『アイルランドの歴史と古代研究序説』（*An Introduction to the Study of the History and Antiquities of Ireland,* 1772）によって、法廷弁護士になりたてのこの二十六歳の若者は、アイルランドの古代世界にすっかり魅せられてしまう。ダブリンへ戻ったオグレイディは、早速「王立アイルランド学士院」（Royal Irish Academy）へ通い始め、オハロランの『アイルランド史』（*General History of Ireland,* 1774）三巻の耽読に取り掛かるのである。

オグレイディをこのようにアイルランドの勇壮な歴史世界に誘ったのは、一体、何であったのか？アイルランドでは、既に約一世紀近くに渡ってかなりの量の古文資料の収集と研究が行なわれていたが、それらは学者の研究室か文書保存庫に納められるだけで、全く一般の人の知ると

ころにはなかった。しかも、アイルランドの神話・民話を語り継ぐことができる者も、もはやゲールタハト（Gaeltacht）と呼ばれるアイルランド西部辺境に細々と暮らす農民達を除いてはいなかったのである。スコットランドには『オシアン』（*Ossian*）あり、ウェールズには『マビノーギオン』（*Mabinogion*）があるが、アイルランドにはそういう類のものがないことに、オグレイディは直ちに気づいたに違いない。彼は古文書の研究に手を染めるとき、好古学者から与えられたアイルランドの歴史資料を客観的に記述するだけでは満足しなかった。『アイルランドの歴史』の序文で述べているように、「この国の祖先が送ってきた生活を、想像的なプロセスによって再創造するため」（for the reconstruction by imaginative processes of the life led by our ancestors in this country）[2] の広範な材料を、歴史家に提供することができる準備は既に整っている。試みられた手法は、取り上げられる英雄時代の歴史に芸術的な要素を加えることによって、‘生きた’歴史として復元するというものであった。具体的には、歴史を当代の考古学の発見によって照らされた光に置いて絶えず眺めるなかで、できるだけ吟遊詩人の表現のスタイルや特徴を取り入れ、またしばしば彼等の実際の言葉を使用するという方法である[3]。いうなればその関心は古代の勇者時代の資料を咀嚼、改変し、芸術的な要素を加えたアイルランド史、一種の*叙事詩*を書くことに向けられたのである。『アイルランドの歴史』出版の二年後に書かれた論文『初期吟遊詩人の文学』（*Early Bardic Literature*）では、採用された手法については多々異論があっても、アイルランドの歴史を世界の国々に注視させる唯一の有効で価値あるものとして、「私が強く望んでいることは、この英雄時代を再びこの国の想像力の一部にすること、またかつてそうであったように、我国の人々の心がその主だった登場人物に、

親しみを抱くようにさせることである」と述べている[(4)]。さらに、オグレイディはこのような古代のアイルランド王や英雄達を取り扱う場合において、従来取られてきた単なる歴史のみとしての記述方法では、一般大衆を読者として獲得することはできないとも主張している。

かくして、『アイルランドの歴史』は、エヴァン・マッハ（Emain Macha）の館と赤枝騎士団（the Red Branch）、「クーリーの牛争い」（Táin Bó Cuailnge）、デアドラ（Deirdre）の悲話などを語り始める。なかでもとりわけ異彩を放つのは、ホメロスの『イリアス』におけるアキレウスに比すべき闘士であり、メーブ女王（Queen Meave）と赤枝騎士団との合戦に活躍するクフーリン（Cuculain）の雄姿である。オグレイディがクフーリンを活写する件を、『アイルランドの歴史　第二巻』（1880年）なかに見てみよう。取上げた場面は、クフーリンがコノハトの女王メーブとの軍勢との決戦の前に、クランナ・リュウリィの城壁の上から雄叫びをあげるところである。

> But he, Cuculain, the son of Sualtam, stood afar upon the rampart of the Clanna Rury, a portent of war clear seen like flame against the dark western clouds, terrible in his beauty, and his voice rang across the battle like the shout of a battalion, or the sound of some mighty trumpet explored by the blasting of the breath of a giant. As when mariners in the western main plying southwards past Dûn-na-m-arc and the House of Donn, whose ship the tempest shakes, and the wild billows buffet; and they, in the darkness and the storm, hear around them the thunder of the waves upon iron coasts, who, being impotent, anticipate certain death; and as when, to them rounding suddenly and

unawares some concealing promontory, there shines far away the ship –protecting light which crowns that black rock that was the grave of Iar, and afar over the tossing waters there streams the glorious ray.(5)

このような引用の例から感じられるのは、オグレイディの企図が、歴史と文学との橋渡しにあろうと歴史を文学に奉仕させることにあろうと、いずれにしても彼の資質が歴史家よりも詩人として発揮されているということである。翌年に出版される『批評的で哲学的な歴史』（*Critical and Philosophical History*）では、これまでの資料編纂の方法に固執する人達の不興を恐れてか、「ある国の歴史は諸状況と事件の不可避な進展によって作られるが、その国の伝説はその国の人々自身のために作り上げられるのだ」(6)といい、「俗な現実との接触に疲れ果てた人間の知性は、暫しの平穏と安寧を求めて、昼と夜とが交錯する朧げな領域に立ち戻る。そしてその眠りにおいて、明け方の白みゆく夜に向かってその夢を投射するのである」と続けている。さらに、オグレイディは伝説と歴史との関係について、次のような所見を述べている。

The legends represent the imagination of the country; they are that kind of history which a nation desires possess. They betray the ambition and ideals of the people and, in this respect, have a value far beyond the tale of actual events and duly recorded deeds, which are no more history than a skeleton is a man. Nay, too, they have their own reality. They fill the mind with an adequate and satisfying pleasure. They present a rhythmic completeness and a beauty not to be found in the fragmentary and ragged succession of events in time.

Achilles and Troy appear somehow more real than Histiaeus and Miletus, Cuculain and Emain Macha than Brian Boru and Kincora.(7)

予てからオグレイディには、カーライル（Thomas Carlyle）が『英雄と英雄崇拝』（*Heroes and Hero-Worship,* 1841）において唱道したロマン的な英雄観、つまり傑出した個性を持つ偉人の思想や行為が歴史を構築する、といった歴史観に共鳴するところがあった。この主張を自国アイルランドに重ねてみると、彼自身も所属する衰退の危機に瀕しているアングロ・アイリッシュの支配階級が、ゲール（カトリック）階級からその主導権を取り戻して、古代の英雄のようにこの国の指導に当らなければならないという真意が透けてみえる。『トーリー主義とトーリー民主主義』（*Toryism and Tory Democrasy,* 1886）では、ぬるま湯につかったようなアングロ・アイリシュ階級のなかから、愛国的忠誠心に富んだ英雄のような若者が出現することへの期待が、いかにも彼らしい辛辣な調子で語られている(8)。そうであるならば、「アイルランドの古代の英雄達を、この国の人々に親しみを感じるような存在にさせる」といったオグレイディの目論みも、特に自分の属する階級の人々に向けられたものであると考えられ、彼自身のナショナリズム意識が色濃く滲み出たものと理解することができる。

イェイツはその『自伝』（*Autobiographies*）のなかでオグレイディのことを回顧して、「政治においてはユニオニストであり、アイルランドで最も保守的なデイリィ・エクスプレス紙（*Daily Express*）の主筆であり、あらゆる形態の民主主義を嫌った」多分に情熱的で喧嘩好きな人物であったと評している(9)。さらに、アイルランドの小地主のもとに生まれ育ったオグレイディが、その心のすべてを捧げかつ著述をしたの

は、その階級に属する人々ためにであったということにも言及している。オグレイディとは「彼が最も大切にしているもの全てについて、その怒りが‘白鳥の歌’となる」人間であった。そして「まさしくその理由から、あらゆるアイルランドの想像的な作家は、その魂の一部をオグレイディ負っているのだ」(for that very reason every Irish imaginative writer owed a portion of his soul）という惜しみない賛辞をイェイツは送っている。いみじくもこの言葉が示すように『アイルランド歴史』は、後に文芸復興で活躍することになる若い作家達に大きな影響を及ぼしていくが、イェイツ自身も十代の頃にオグレイディのこの書物によって初めて、アイルランドの壮大な古代世界を眺めることができたのである。そして、そこで描かれる英雄達の生き生きとした姿は、後に『アシーンの放浪』（*Wanderings of Oisin,* 1889）や『デアドラ』（*Deirdre,* 1907）や『クフーリン劇四部作』（Cuchulain cycle）となって結実していく。

文芸復興運動の苗床となったのが、C. S. パーネル（Charles Stewart Parnell）死後のアイルランド情勢であるが、このあたりの事情にも少し触れておく。M. ダヴィド（Michael Davitt）から引き継いだアイルランドの「土地問題」が、グラッドストーン（W. E. Gladstone）の提出した土地法（第二次、1881年）によって一定の目途がついたと判断したパーネルは、次なる政治目標を「自治問題」(home rule）に定めた。1885年の十一月に行なわれた総選挙において、パーネル率いるアイルランド議会党（Irish Parliamentary Party）は大幅にその得票数を伸ばし八十六議席を獲得するが、「アイルランド問題」の解決に熱心だったグラッドストーンを党首とする自由党内閣（第三次）の成立には、この議会党の議席が必要であった。英国議会を巧みな戦術で翻弄するパーネルは、グラッドストーンとの連立を条件に、1886年四月に懸案のアイルランド自治

法案（第一次）を提出させる。このような経過を辿るなかで、パーネルを失脚に追い込む陰謀が準備される。パーネル配下の議員であったW.オシェイ大尉から起された、‘離婚’（姦通）をめぐる訴訟にパーネルは巻き込まれるのである。次期選挙と連立への影響を心配するグラッドストーンの諫言に動じず、依然として党首であり続けるパーネルの態度に党内は紛糾し、ついにアイルランド議会党は分裂することになる。少数派となったパーネルは直ちに遊説の旅に出るのであるが、その疲労が重なって1891年の秋に四十五年の波乱に満ちた生涯を閉じるのである。国民の期待を一身に背負っていたパーネルの突然の死によって、アイルランドの政情は一挙に空洞化してしまう。稀代の政治家を失って呆然自失したアイルランドは、ある種の虚脱感に襲われたといってよい。パーネル死後のアイルランドは、「土地問題」においては、それが解決するなかで土地を得た農民層は満足し保守化していき、「自治問題」もそれに反対する保守党の「友好的政策」（constructive unionism）によって人々の脳裏から離れていく。イェイツはこのような局面の一端を、『瑪瑙の彫琢』（*The Cutting of an Agate*）所載の評論『詩歌と伝統』（*Poetry and Tradition,* 1907）のなかで、次のように表白している。

> ･･･ Power passed to small shopkeepers, to clerks, to that very class who had seemed to John O'Leary so ready to bend to the power of others, to men who had risen above the traditions of the countryman, without learning those of cultivated life or even educating themselves, and who because of their poverty, their ignorance, their superstitious piety, are much subject to all kinds of fear. Immediate victory, immediate utility, became everything, ･･･ (10)

また後年イェイツは劇『窓ガラスに刻まれた言葉』（*The Words upon the Window-pane,* 1934）のノートのなかで、パーネルの死によってかえって、「現実の政治や土地問題さらに政治的な憎悪などから想像力が開放されたのであり、また想像的ナショナリズムやゲール語や古代の物語へ、さらには叙情的な詩歌や劇のほうへと、想像力が向けられることになった」[11]と述べている。長く続いた政治的ナショナリズムの喧騒がひとまず収束することによって、文化的ナショナリズムを強調する文芸復興の主力であるアングロ・アイリッシュ支配階級に、その主導権を握ることのできる好機が巡ってきたというわけである。このことをT. イーグルトンは次のように説明している。

> いずれにせよゲール・ナショナリズムが次第に政治的領域を征服するにつれ、文化は「ナショナル」志向のアングロ・アイリシュの知識人たちが、なおも支配権を行使しえた数少ない政治形態のひとつとなった。国民に対して政治的主導権をふるうことに失敗した彼らは、最後の土壇場で精神的ヘゲモニーに訴え、熱烈に国民文化を復活させようとした。[12]

十九世紀初頭にイギリスとの併合で始まり、D. オコンネルの偉功「カトリック解放令」（1829）、さらに「アイルランド国教会の廃止」（1869）や「土地戦争」の進展（1880s）と遷移してゆく一連のアイルランド情勢を、ゲール・カトリック層がアングロ・アイリシュのプロテスタント層に代わってその優位を着実に固めていく歴史として見ることができる。そこで提唱されるナショナリズムが、ゲール・カトリック的な政治色を帯びるのもまた当然のことでもある。このような事態を、これ

までこの国を支配しその特権を享受してきた、人口の二割ほどのアングロ・アイリシュのプロテスタント層が、どのような心情で眺めていたかを想像するのはさほど困難ではことではない。さらに、アングロ・アイリシュの抱く不安を増幅する人物の一人に、『リーダー』（*The Leader*）紙の社主兼編集者のD. P. モラン（David P. Moran）がいた。彼の思想の大本は、‘shoneen’（英国の風俗や習慣を真似るアイルランド人）や‘West-Briton’（英国に同調的なアイルランド人）といった侮蔑的な単語に象徴されるように、「ゲール同盟」（Gaelic League）のD. ハイド（Douglas Hyde）のそれを遥かに凌ぐ徹底的なアイルランドの「脱イギリス化」（de-Anglicizing）を進めることにあった。これらの単語を用いながら、彼が自紙や『ニユー・アイランド・レヴィユー』（*New Ireland Review*）の紙面によって盛んに唱えたことは、アイルランド文化のアイデンティティは、ゲール的でかつカトリック的なものであり、アングロ・アイリシュのプロテスタントにはなんら関わるものではないということであった。アイデンティティの喪失の危機に立たされたアングロ・アイリシュの知識人にとって、このような状態を巻き返すための対応、すなわちゲール・カトリックの政治的ナショナリズムに代わる新たな文化ナショナリズムによるアイデンティティの確立が急がれたのである。彼等が講じた手段は、かろうじて残されていたゲール文化の遺産を自らの手で発掘することで、政治的・宗教的な対立のない英雄的で自己犠牲的な古代世界を、現代のアイルランド社会に提示することであった。かつてこの国の祖先の世界は、神秘的で異教的な魅力に溢れ、しかも有機的統一が実現している社会であったのだと。いまや立場が逆転したゲール・カトリック層にとっても、このような古代世界は、高揚しつつある政治的自信の媒体として、またこれまで受けてきた心的外傷や損失を霧

散させるものとして必要とされるであろうと。劣勢にあるアングロ・アイリシュは、このようにしてゲール・カトリックの政治的ナショナリズムの湍流を逸らそうとしたのである。英語を使用する文芸復興派の著作は、ゲールのものからは異質であり退廃的なものであるというモランの非難を浴びるなかで、イェイツらの文芸復興派の文学者達は自分達の著作活動によって、物質的な要求を偏重する政治的ナショナリズムから、アイルランドを救済することができるだと大真面目に信じていたのである。

アングロ・アイリシュが抱いたこのような不安を、ヴィクトリア朝下の英国本国の中産階級が抱えた危機意識と類似した現象として捉えることができる。つまり、彼等が産業の発展によって大量に生み出された労働者階級や‘成り上がり’の台頭によって脅かされる事態は、カトリックに脅かされるアングロ・アイリシュと同一のものと見ることができるというものである。彼等はまた、時代の物質主義的傾向や新たな哲学によって、従前は確固としていた信仰の土台が根本から揺さぶられ、既成の道徳・倫理がもはや通用しなくなって、自らのアイデンティティを失いかけていた。このような時代の‘無秩序’を克服するために持ち出されたのが文化（culture）であった。ここに、「この世において考えられ、知られうる限りの最善もの」を知ろうとする努力とは、人間完成への教養（culture）に他ならないとする思想を掲げた、マシュー・アーノルド（Matthew Arnold）の登場をみることになる。

2. マシュー・アーノルドのケルトとイェイツ

評論『善悪の観念』（*Ideas of Good and Evil*）所載の「文学にみるケルト的要素」（*The Celtic Element of Literature,* 1902）のなかで、イェイ

ツはケルト民族の特質と見なされるものを、E. ルナン（Ernest Renan）の『ケルト民族の詩歌』（*The Poetry of the Celtic Races*）やマシュー・アーノルドの『ケルト文学の研究』（*On the Study of Celtic Literature*）のなかの著名な文章を用いて再述している。ケルト民族には「自然そのものにたいする愛や自然の魔術にたいする新鮮な感覚があったが、これらには人間が自然と向かい合って、自分の起源と運命を語る声が自然のなかから聞こえてくるように思うときに知る、あの憂鬱が交じり合っている」であるとか、「自然にたいするケルト民族の情熱は、おもに自然のもつ‘美’感というよりも‘神秘’感から生じるが、その情熱が自然に‘魅力と魔力’をつけ加えるのである」といった件である(13)。さらに、このような文章が人々に周知されている事情を感慨しながらも、英文学にみられるとされるこれらの特性が、すべてケルトにその源を発しているという巷説は、主としてアーノルドが流布させたということも確認している。しかしながら、これらの見解にあまり斟酌することなくあっさり容認するイェイツの態度に、いささかの戸惑いを感じざるをえないのである。アーノルドが‘ケルト的な特質’なるものに特に拘泥し固執する理由についてのイェイツの評価がはっきりしないからである。ただこのすぐ後で、アーノルドの意見のどの点が有益でどの点が有害か考察せねばならないとし、イェイツは「さもなければ敵が私達のバラ園を掘り返して、代わりにキャベツ畑を作ることにもなりかねない（the enemy root up our rose-garden and plant a cabbage-garden instead）」(14)といったような意味深長な言い回しをしているのではあるが。確かに、十八世紀の合理主義と十九世紀の物質主義の反動が交じり合った時世において、ケルト民族の想像性と憂鬱には、『ケルト文学の研究』で何度も繰り返される文言を借りて表現すれば、‘事実の横暴に対する情熱的で激

しい不屈の反動’（a passionate, turbulent, indomitable reaction against the despotism of fact）[15]といった中和作用が期待されるのであろう。ところが、今や人々にすっかり定着したこのケルト的な特質とは、アーノルドが頻りに唱えるヴィクトリア朝期の「俗物主義」（philistinism）を超克するために着意されたものであって、多分に恣意的に創り上げられた言説でもあったのである。都市中心の物質的な産業社会を迎えた十九世紀後半のイギリスにおいて、それに伴う急激な価値観の変化によって狼狽した人々は、そのような社会の対蹠におかれる（自らが破壊してきた）ノスタルジックな伝統的社会を、自らが想像した「ケルト」文化なるものに代行させようとした。コンテキストを変えて眺めると、ギリシャ・ローマ精神を一貫して追求してきたヨーロッパ社会が、理性を所依とすることに行き詰った結果、そのことを相対化する手段として都合よく‘発見’したものが、ヨーロッパ「固有」でありしかも「土着」の「ケルト」文化であった。

『ケルト文学の研究』は、アーノルドがオックスフォード詩学教授職にあった最後の時期の1865年末から翌年の春にかけて行なった講義が基になっている。彼がケルトに関心を向けることになる機縁は、ケルトの血を引くルナンの論文『ケルト民族の詩歌』を読んだことにあったが、1864年の夏にウェールズのランディドノ（Llandudno）で開催された「アイステズヴォード」（Eisteddfod,「吟遊詩人大会」）を訪れたことも、その強い動機となった。四回にわたる講義は初め雑誌『コーンヒル・マガジン』（*Cornhill Magazine*）に掲載され、翌67年に単行本として出版されることになる。ところでアーノルドはケルト語を些かも理解することがなかったので、ケルト文学について講義するということについては多分に躊躇するところがあったはずである。幸いなことにその懸念

は、E. オケーリィ（Eugene O'Curry）が1855–6年にカトリック大学で行なった「アイルランド古代史写本資料についての講義」（*Lectures on the Manuscript Materials of Ancient Irish History*）によって解消されるが、この講義は1861年にJ. H. ニューマン（John Henry Newman）の手によって既に出版されていたのである。アーノルドは、英国中産階級が陥っていた「俗物主義」—美と趣味の点からみて低俗であり、道徳と感性の点からみて粗雑であり、心性と精神の点からみて無知であること[16]—を矯正する手段として、ケルト民族が持つ特質に狙いを定めたのである。アーノルドのこの講義は世間の関心を多いに呼ぶこととなり、そのケルト復興の功績が認められて、1877年にオックスフォードのジーザス・コレッジにケルト文学講座が設立されることになる。

『ケルト文学の研究』において、アーノルドはイギリスの国民性に混在しているというゲルマン的要素とケルト的要素とを比較・分析している。ゲルマン的要素は、「実直的な堅実さ」（steadiness with honesty）という言葉で表されるが、この要素には「広範なレヴェルにおける単調な通俗さと凡庸さがあると共に、姿形についてのあらゆる美と識別における欠如」があるという。しかしゲルマン的要素には、「勤勉、善行、物事を我慢強く着実・精巧に仕上げる能力、人間活動のあらゆる分野を統括する科学的観念」といった長所があることも忘れずに指摘している[17]。一方、ケルト的性質を一語で表すと「感傷的」（sentimental）という語が最も適切であるとし、「さまざまな印象を素早くかつ強く抱く構成力、喜びと悲しみに鋭く反応する生き生きとした個性」が肝所であると説明されている。ケルト人の気質は「物寂しげな哀惜のなかにも、情熱的で心に染み入る憂愁のなかにも見ることができよう。しかし、その本質は生命と光と情緒への熱烈な憧れであり、心広く冒険好きで陽気

だということにある」とし、さらに

> ･･･ and the impressionable Celt, soon up and soon down, is the more because it is so his nature to be up—to be sociable, hospitable, eloquent, admired, figuring away brilliantly. He loves bright colours, he easily becomes audacious, overcrowing, full of fanfaronade.[18]

といったような要素を列挙する。アーノルドは、ケルト人の非世俗な精神といったものとゲルマン人の世俗的な堅実な実際性とを対比することによって、ヴィクトリア期中産階級の退屈きわまりない物質主義からは、「自然の魔術」（natural magic）を特徴とするケルト詩歌のようなものは、決して生まれないということを強調している。また彼は、「俗物主義」と「地方偏狭」（provinciality）を排して全人的人間完成のために具備すべきものは、「この世界において考えられ、知られる事のうちで最も崇高なもの」（sweetness and light）、すなわち「教養」（culture）であると力説するのであるが、このテーマは『教養と無秩序』（*Culture and Anarchy,* 1869）において引き継がれていく。

アーノルドは「タリシエン（古代ウェールズの吟遊詩人）やオシアンの末裔についてくだらない話をするセンチメンタリスト」というのが、『タイムズ紙』に掲載された『ケルト文学の研究』の書評であった[19]。このような酷評や払拭し難い「ケルト嫌い」（Celt-hater）に対してアーノルドは、『ケルト文学の研究』の「序文」で「見よ、イギリスがアイルランド支配することの難しさを」（‘*Behold England's difficulty in governing Ireland !*’）[20]と応酬している。結論の部分でも、「次のことを、数ある罪のなかでフィニアン運動の罪深い下手人である俗物どもに

向けた、我らの天使にも似た復讐の一つにしようではないか、オックスフォードにケルト語の講座を創設し、科学の穏やかな助力を通してアイルランドに平和のメッセージを送ることを。」[21]と締め括っている。これらのことから、アイルランド問題におけるアーノルドの見立てが、特にフィニアン運動の興隆については、イギリスの俗物達の実利的なアイルランド支配の代償であるとしていることが分かる。しかしながら、ケルト民族にたいするアーノルドのこのような一見温情に溢れる態度の裏には、次のような本音が隠されていた。「アイルランド住民を含むこの島のすべての住民を、同じ英語を話す一体のものとして吸収することによって、その間を塞ぐ様々な障害を取り払い、またそれによって個別の地方的民族性を併呑するのは、ごく自然の成り行きであり･･･ウェールズ語などもそれが早く消滅すればするだけ、イングランドにもウェールズにとってもよいことなのである」[22]。このような見方をしていたので、アイルランドについてもイギリスが多くの自由を与えるべきであるというものではなく、せいぜい彼らをもっと好意的に扱うべきであるというが、実はアーノルドの本心であった[23]。

アーノルドの『ケルト文学の研究』の主調は、その「序文」にはっきりと表われている。つまり、彼の唱える「ケルト」理解と称揚には、ケルト系の人々をいち早くイングランドに同化・吸収させようとする政治的意図が明瞭に読み取れるということである。さらにこれに加えて国家間のイデオロギー的競合があった。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』にみられるように、当時の後進列強の一国として台頭しつつあったプロイセンの存在を、特に意識している様子が窺えるのである。プロイセン議会において、ドイツ統一の使命を時の国王ウィルヘルム１世から託されたビスマルクが、「鉄血演説」を行なったのはアーノルドの『ケルト文

学の研究』講義に先立つ三年前のことであった。質実剛健一点張りのプロイセンのゲルマン的気質の高揚に対して、我がイギリス人の国民性にはその様なゲルマン的気質はもとより、繊細で感受性豊かなケルト的気質も持ち合わせており、さらには物事の事態に明晰かつ精力的に対応する才能に長けているノルマン的気質までをも兼備しているといった具合である。このような事情を勘案してみると、オックスフォードのジーザス・コレッジに早々とケルト文学講座が新設されることになった事由が理解される。ドイツのゲルマン民族意識の礼讃に対抗するためには、‘アイルランド問題’というイギリスの喉に長年に渡って突き刺さった骨を早急に取り除き、イギリス国民が一枚岩にならなければならない。そこで『ケルト文学の研究』の「序文」の最後で、アーノルドは

> Let the Celtic members of this empire consider that they have to transform themselves; and though the summons to transform themselves to be often conveyed harshly and brutally, ･･･Let them consider that they are inextricably bound up with us, and that, if the suggestions in the following pages have any truth, we English, alien and uncongenial to our Celtic partners as we may have hitherto shown ourselves, have notwithstanding, beyond perhaps any other nation, a thousand latent springs of possible sympathy with them.(24)

と訴える。約八世紀に渡る過酷なアイルランド支配と浴びせ続けた侮蔑の後で、アーノルドはこのように「大英帝国のケルト系の人々」を説き諭すのである。後年になって、E. バーク（Edmund Burke）の著作の編纂によってアーノルドは、アイルランドの悲惨と不満はアイルランド人

の欠点というより、イギリスの失政と不公正にあることを改めて検証することになる。しかしながら矢張りその責任は「イギリスの俗物」にあるのだということを再言していることから、グラッドストーンの手掛ける自治法案などはアーノルドにとって問題外であり、「アイルランド問題」の解決に向けての得策は、アイルランドをより公平に扱うことによって、アイルランドの側からイギリスとの連合を心から願うように取り計らうことにあった(25)。

端的にいって、アーノルドの『ケルト文学の研究』の問題は、アイルランド人自身にとっても定かならぬ‘ケルト的気質’なるものを前提としたうえで、単純・簡略化された民族気質を援用して、英詩におけるケルトの影響について次のように論じていくことにある。

> If I were asked where English poetry got these three things, its turn for the style, its turn for melancholy, and its turn for natural magic, for catching and rendering the charm of nature in a wonderfully near and vivid way, —I should answer, with some doubt, that it got much of is turn for style from a Celtic source; with less doubt, that it got much of its melancholy from a Celtic source; with no doubt at all, that from a Celtic source it got nearly all its natural magic.(26)

イェイツも「文学にみるケルト的要素」において、「アイルランドについて書く我々の皆がこれらのケルト的特質にもとづいて議論を組み立てているとは思わないが」と述べながらも、格別にアーノルドの意見に疑念を抱くこともなく、上記の引用した部分をそっくり繰り返したあとで、次のように自説を開陳するのである。「このことを私は別の言い方

をしてみたいのだが、もし古代の情熱や信念に絶えず満ち溢れていなければ、文学は単なる状況の記録、情熱に欠けた空想、情熱の欠いた瞑想に落ちてしまうのだ。」[27] さらに続けて、スラブ系、フィンランド系、スカンジナビア系とケルト系の四つのものを、ヨーロッパにおける古代の情熱や信念の源泉として挙げている[28]。これらの源泉のなかでは、特にケルト系のものが何世紀に渡ってヨーロッパ文学の本流の近くにあったと説明されるが、この裏付として持ち出されるのが、またしてもルナンの見解でありアーノルドの意見なのである。そして、「ケルト運動とはヨーロッパのいかなる源泉にも増して豊富な源泉である（とイェイツが考える）ゲール伝説を開放することにある」（'The Celtic Movement', as I understand it, is principally the opening of this fountain）[28]、つまり自分たちが正に今展開しようとしている「文芸復興」によって、ゲール伝説という水源が開けられようとしているとの結論を導出するのである。イェイツの目的にも、ケルト神話をモチーフとした作品をもって「文芸復興」運動を展開するなかで、アイルランドの国民性を'矯正'することがあった。このようなイェイツの姿勢は、英国からの分離主義の立場を取っていたことを除けば、アーノルドのものとさして相違がないようにも思われる。ここのところに、アイルランド支配に加担してきたプロテスタント新興階級の複雑な立場、その階級に属する者としてのイェイツ立場を我々は窺い知ることができるのである。

3. ナショナリズムの諸相とアイルランド・ナショナリズム

ナショナリズムとは近代的な現象であり、十九世紀の前後、特にフランス革命以後に始めてヨーロッパに登場したものであることは、現在、

ほぼ学術的な合意が得られている[29]。『オックスフォード英語辞典』（*O. E. D.*）によると、「ナショナリズム」（nationalism）の初出は1836年であり、「特定の国民が神の選びの対象であるとする教義」、つまり選民意識という意味をもつ語となっている。ナショナリズムの最も早い意味に神学的な語義を見出すのは、この語のもつ本質に触れるようで極めて興味深いことであるが、我々が現今使用している意味でのナショナリズム、「その人の国家にたいする献身、国家的な熱望、国家として独立を得る政策」（devotion to one's nation; national aspiration; a policy of national independence）という語の出現も、その直後の1844年となっている。そもそも「ネイション」（nacion）という語も、スペイン語の辞典を詳悉したE. J. ホブズボームによると、「共通な政府という至高の中心を受容する一国家または政治体」、または「そのような国家及びその個々の住民によって構成されるひとつの全体としての領域」という意味を現在では担わされているが、この言葉は1884年までは依然として「ある地方、国、王国の住民の集合」を意味していたのであり、また「外国人」の意味を持っていたのである。従って、ネイションという語の第一の意味は、「生まれ、または血統」を表しており、ドイツ語に借用された後もこの語は、（他の団体から区別される必要から）「比較的に大きな自立的諸集団」、先ほどのスペイン語の「外国人」と同義の「ネイション」、「特権を享受する外国商人の社会のネイション」、「大学の学生達の同郷のネイション」などとして使われていた[30]。因みに、*O. E. D.* における nation の項目には、「初期の用例には民族的観念が政治的なそれよりも普通強くあって、最近の用法では政治的な統一や独立といった概念が顕著である」との説明がなされている。このようなことから、「ナショナリズム」や「ネイション」という概念は、この150年ほどの間にヨ

ーロッパで生み出されたものであって、決して普遍的な現象といったものではないことが分かる。

一方、ナショナリズムが十九世紀のヨーロッパに生まれた‘教義’であるという見解は、十八世紀以前においてナショナリズムというものが果たして存在していたのかという議論を呼び起こす。この問題については、近代以前にも「ネイション意識」(national consciousness) といったものがしばしば存在した、ということは通常異論のないものとされている。そこで争点となるのは、ネイション意識が先行して存在していることによって、近代ナショナリズムはその発生が可能となったのか、あるいは、それがなくても近代ナショナリズムは発生したのかということになる。「近代派」と呼ばれる A. ゲルナー、A. アンダーソン、ホブズボームなどは後者の立場を取るのにたいして、「反近代派」と呼ばれる前者の泰斗とされる A. スミスは、ナショナリズムやネイションという近代的自己認識は、そのしっかりとした根源を、前近代の民族性に内在させていると主張する。このようにナショナリズムと呼ばれる現象自体も、現在さまざまな諸家の見解が展開されているわけであるが、先ず、本章ではいくつかの代表的なナショナリズム論について概観する。次に、アイルランド・ナショナリズムを先導する知識人であったアングロ・アイリッシュの支配階級の立場を睨みながら、アイルランドにおけるナショナリズムがどのように位置づけられるのかを、主にスミスのナショナリズム論を参考にして考察してみることにする。

3. 1. ナショナリズム論

先ず、ナショナリズムの政治的な側面に言及するのはゲルナーである。『民族とナショナリズム』の巻頭では、ナショナリズムは「政治的

な単位と民族的単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理である」と定義される[31]。そして、感情としてのナショナリズムとは、この原理が犯されることによって生ずる憤りの心情であり、またそれが満たされたときに生じる充足感のことであるが、ナショナリズムの運動はこれらの感情によって動機づけられているとする。また、ナショナリズムのイデオロギーには広汎な虚偽意識がみられるという。例えば、ナショナリズムは、歴史に深い断絶があるのにもかかわらず連続性を強調して擁護し、また、文化の多様性を説き保護するとしながらも、往々にして政治単位内部や単位間でその均一性を要求するからである[32]。このことを、ルナンは『国民とは何か』（*Qu'est-ce que'une nation ?* 1882）のなかで「自己の歴史を誤解、忘却することが、ネイションの創造の本質的因子の一つである」[33]と述べている。同質の文化的単位を政治生活の基礎とするなかで、支配者と被支配者は共に文化的に同一でなければならないというナショナリズムの原理、この原理自体も決して一般的な社会条件の前提として刻み込まれているわけではないし、ましてその本質とされるものでもない。その刻み込みが自明であるかのように喧伝するナショナリスト達の言説は、彼等が巧みに提示する虚偽であるというのである。ゲルナーは、ナショナリズムの原因を、農業社会から産業社会への移行を容易にする構造的な過程に求めている。産業社会では前近代の農業社会と違って、その社会が効率的に機能するためには言語を基盤とした同質で高度な文化が必須であるために、近代においてナショナリズムが台頭したというのである。言語に基盤を置いた文化は目に見えるものであるから、その集団の矜持の源泉となり、また自己認識の核ともなる。今や焦点はメディアに当てられる。しかもメディア自体が重要であって、伝達されるメッセージに含まれる内容がどのような

ものであるかは関係がなく、コミュニケーションそのものが存在していることが重視される。つまり、浸透性に富み抽象的で集中化され、かつ規格化された一から多へ向けられるコミュニケーションが、ナショナリズムの中心概念を生み出すというわけである。そのメッセージにおいては、伝達において使用される言語と文体に重点が置かれ、それを理解出来る者のみが一体化した道徳的で経済的な共同体に加わることができ、それが出来ない者はそこから排除されることになる[34]。

ゲルナーに批判されるE. ケドゥーリーのナショナリズム論は、政治と思想の複雑なイデオロギー相互関係の結果として捉えられている。最初に彼が照合するのはカントの哲学である。「自由意志であるところの善なる意志というものはまた自律的な意思であるという」カントの「新方式」にケドゥーリーは着目するのである[35]。カントによると、本来それ自体で自由と平等との権利を有する個人は、自ら発見した規範―外在的な世界に頼ることなく内なる世界に見出す道徳に従うとき―によって自分自身を自由で道徳的な存在だとすることができる。かくして道徳的存在たる個人は、自己決定力を持つことが可能となる。ナショナリズムとは概ね民族自決の教義といえるが、その活力の大きな源泉を見出したのはこの自己決定力によるとされる。そしてケドゥーリーは、自己決定というものが最高の道徳的または政治的な善であるという思想こそが、必然的に政治的思索に重大な変化をもたらしたのだと説明する。ケドゥーリーが次に当たるのはフィヒテの思想である。フィヒテにおいて人間精神は「自我意識」として捉えられ、自我の「事行」（Tathandlung）として表現されるものである。また、カントに深く傾倒したフィヒテは、社会全体はその個々の部分（個人）よりも重要であるとし、カントの「個人の自己決定」を集団的な意味へと奪胎するのである。ナポレオ

ンによるフランス軍占領下のベルリンにおいて、ドイツ国民を激励し鼓舞するために行なわれた講演『ドイツ国民に告ぐ』（*Reden an die deutsche Nation,* 1807–8）は、民族自決とは最終的に意志の決断なのであり、ナショナリズムとは意思の正しい決断を教える方法であることを主題としたものであった[36]。ところで、ナショナリズムが究極的には意志に基づくという考え方は、後年になってルナンが『国民とは何か』として講義した「国民の存在は日々の人民投票（un plébiscite de tous les jours）である」という考えと一致する。しかしこの文言が、普仏戦争の結果ドイツに割譲されたアルザス・ロレーヌ地方が、ビスマルクの強力な同化政策にたいして、抵抗運動を展開していたことを踏まえたものであることに留意しなければならない。（フィヒテと同じくルナンも反ユダヤ主義者であり、さらに植民地主義者でもあった。）

「近代派」の一人であるアンダーソンの理論の出発点は、「ナショナリティ」[37]はナショナリズムと共に、特殊な「文化的人造物」であるというところにある。さらにこの人造物は、十八世紀末の歴史的な諸力が複雑に交差するなかで、自ずと濾過され生成されてくるものでもある。アンダーソンは、国民というものをイメージとして心に描かれた「想像の政治的共同体」（an imagined political community）として定義する[38]。この時期に「同時性」から「因果関係」への歴史認識の変化があった。この変化が「想像の共同体」の誕生にどのように寄与したのかは、十八世紀のヨーロッパではじめて起こった二つの想像様式、小説と新聞の基本構造のなかに見られるとアンダーソンはいう[39]。ゲルナーとは多少違う意味で、アンダーソンにとってもマス・メディアが重要となる。出版資本主義によって、ますます多くの人がこれまでと全く違った方法で自らを考え、かつ自己と他者とを関係づけることが可能となった。今

や、この新しい‘共同体を想像’することが、資本主義（生産システムと生産関係）、コミュニケーション技術（印刷・出版）、言語の多様性との間に起こった予想外の急速な相互作用によって容易となったのである。この最後の「言語の宿命的な多様性」に大きな価値をおく思想は、以前からJ. G. ヘルダーよって主張されていた[40]。ヘルダーによると、文化的多様性は本質的価値を有するものであり、本来それぞれの民族や国民（ネイション）に埋め込まれているものであるが、それが最も神聖な形で現れるのはそれぞれが持つ言語においてである。同一の言語を話す共同体は同一の思考形式を持つということから、言語こそがその国民の正統性を保障するものになるというのである。アンダーソンも、国民を歴史的宿命性と言語によって想像された共同体として見ると同時に、ナショナリズムを親族組織や宗教と一緒に分類することを提案している。国民はひとつの（大）家族であるという*隠喩*に示されるように、家族の感情がナショナリズムの喚起する最も根本的なものとなる。そしてネイションの構成員は、大部分の構成員を直接に知ることはないにもかかわらず、各自の心の中に自分たちの一員であるとのイメージを抱く。通常家族とは利害を超越し、無私の愛と連帯があるとこれまで考えられてきた。国民の意味にも家族関係と同様に利害関係をもたないということがあるので、ただその理由だけで国家は国民に犠牲を要求できるということになる。『想像の共同体』（*Imagined Communities*）の「愛国心と人種主義」（Patriotism and Racism）の章でアンダーソンは今一度、言語の問題に立ち返えっている。言語ほど、我々と死者を感情的に結びつけるものはないのであり、また言語だけが特殊な同時存在的な共同性、殊に*詩歌の形式*において示しうる共同性をもちうるのだというのである[41]。

著書のタイトル『創られた伝統』（*The Invention of Tradition*）に示されるように、ホブズボームもアンダーソンと共に、ナショナリズムが「文化的な構築物」であるという点を強調する。上で述べたように、アンダーソンが新たな認識の形成としてナショナリズムを考えるのにたいして、ホブズボームは権威を正当化するためのイデオロギー的な方策を提供するものとしてナショナリズムを解釈している。十九世紀末おける工業化の急激な波によって引き起こされた社会変動は、疎外の増大と不安を生じさせた。このような情況のなかで「創り出された伝統」によって、人々は現在を過去に位置づけ、絶えず変動する世界に不変と安定の感覚をもたらすことを期待した。つまり、ナショナリズムのような政治制度、またはイデオロギー的な活動や集団といったものには先例がないために、実際の歴史の連続性を超えた太古を擬似化ないし捏造することで、歴史的な連続性をも‘創り出す’必要に迫られたのである[(42)]。そして国歌、国旗、あるいは公式・非公式を問わぬ象徴やイメージにおける「国民の擬人化」等という工夫されたものが、全く新たに民族運動や国家の一部として存在するようになるのである。『ナショナリズムの歴史と現在』（*Nations and Nationalism since 1790*）のなかで、ホブズボームはフロフによる開拓者的研究の区分に従って、十九世紀ヨーロッパの民族運動の歴史を三段階に分けている。

A 段階：なんら政治・民族的な含意をもたない純粋に文化的、文学的、民俗的なもの。

B 段階：「民族的理念」を掲げる一群の草分け的な人々と闘士が現われて、その理念のための政治的広告が始まる。

C 段階：ナショナリストは大衆の要求を絶えず代弁しているのだと

主張するなかで、ナショナリストの綱領が、大衆の支持を次第に獲得していく。[43]

この三段階であるが、特にB段階からC段階への移行が決定的な瞬間であるという。ここでボブズボームが照準を合わせるのがエリート層の存在である。以前に述べたように、ボブズボームは近代以前にもネイション意識（「プロト・ナショナリズム」）—集団的な所属感覚の変種として以前から存在しているもので、近代国家（国民）に適合するマクロな政治的規模において機能を果たすもの—があるということを想定している。このプロト・ナショナリズムがナショナリズムの役割を先導するのであるが、そこには当該の共同体がもつ象徴や思想を既存なものとし、かつ近代的な大義や国家の背後で活性化させるエリート知識人の存在が必要とされるのである。

3. 2. A. スミスのナショナリズム論とアイルランド

先ず、「反近代派」のスミスの下すナショナリズムの定義を『ナショナリズムの生命力』（*National Identity*）のなかから確認してみよう。「ナショナリズムとは、特定の全住民のために、自治、統一、アイデンティティを獲得し維持しようとして、実際にネイションを構成しているか、構成する可能性のある集団の一部によるイデオロギー運動である」とある[44]。また、スミスが特に強調する「民族象徴論」(ethnosymbolism)の概念は、ネイションには近代以前に彼が「エトニー」（ethnie）と名づけるルーツ、「共有された記憶のうえに作りあげられた歴史的共同体」(historical communities built up on shared memories)[45]が存在するというものである。この指摘によってスミスは、前近代的なネイション意識

と近代ナショナリズムとの連続性を示唆するのである[46]。つまり、最初に先祖にかんする神話・物語・文化を共有し、ある特定の領域と結びついて連帯の感覚を保持している人間集団がある。そして、その集団がしばしば共感的な価値や神話と象徴の担い手となり、それが何世紀に渡って受け継がれた結果、近代におけるネイションの形成を促すことになるのである。ここでアイルランドのナショナリズムにおけるエトニーの存在の問題を考えてみるとき、少なくともスミスの達見に与するならば、ゲール神話・伝説を保持してきた民衆（農民）がエトニーの主役ということになるだろう。またスミスによると、エトニーは、連続性、共有する記憶、集団としての運命にたいする自覚によって構成されるものであって、現実の出自の繋がりによるものではない。よって、エトニーはある文化的な集団によって把持される特有の神話、記憶、象徴のなかに体現される文化的な近親感によって構成されるものとなる。理念的・概念的なものであると断ったうえで、エトニーは「水平的」なものと「垂直的」なものとの二種類のものに区別される[47]。つまりネイション形成過程には二つの経路があり、ネイションを構築するエスニックの核には異なる型があるということである。その型とは、貴族的エトニーによる官僚的編入の経路をたどる「水平的」なものと、民衆的なエトニーを基盤とした経路をたどる「垂直的」なものとの二つである。ここでしばらくアイルランドが関連すると考えられる、被支配者の共同体である「垂直的」なエトニーについてのスミスの解説を追ってみよう。着目されるのが知識人の役割である。知識階級はこれまで受動的であった共同体を糾合して、共同体の新しい定義や目標を提示することによって、ネイションの変容に参与しようとするのである。その集団の過去が、集団とその土地固有の文化を古い伝統に再解釈を施すことによって前景化さ

れるが、特に古来の聖人や賢人などが、その集団のナショナルな固有の表出となる。アイルランドにあっては、この役割にせっせと勤しんだ知識人—オグレイディやS. ファーガソンのように—の主軸が、プロテスタント支配階級であるということになる。そこで、スミスはボブズボームも挙げた民族運動の歴史の三段階に習うかのように、ネイション形成の過程を五つに分析し、そのなかの重要な局面、「人々を関心の対象とし、大衆をナショナルな価値、記憶、神話のなかで再教育して彼らを賛美する運動」での知識階級の役割について再考する。

> The success of these undertakings hinged on a return by the intelligentsia to a living past, a past that was no mere quarry for antiquarian research but that could be derived from the sentiments and tradition of the people. This meant a twofold strategy for furnishing 'map' of the community, its history, its destiny and its place among the nations, and of providing 'moralities' for the regenerated community, ones that could inspire present generations to emulate the public virtues deemed to express the national character.[48]

この引用の部分を、以前に述べたオグレイディの『アイルランドの歴史』が出版される事情に重ね合わせてみると非常によく合致することに気がつく。続けてスミスは、このような「地図」や「道徳」を構築するのに二つの方法があるという。一つ目は、「自然」とその「詩的空間」に回帰する方法であるが、これらは極めて特殊なものであって、その集団の歴史的故郷、彼らの記憶を蓄える神聖な倉庫となる[49]。いま一つの方法は、歴史を活用・流用すること、とりわけ黄金時代を礼讃するこ

とである。実際、スミスがこの事例として十九世紀末のアイルランドの「文芸復興」を取り上げているが、古代の黄金時代の栄光を発見し声言しようとした文化ナショナリストの知識人として、オグレイディやイェイツの盟友であったグレゴリー夫人の名を挙げている。

さて、「西欧的」合理的かつ結合的なナショナリズムと、「東欧的」有機的かつ神秘的なナショナリズムという二種類のナショナリズムの類型論を提示したのは、ナショナリズム研究の先学 H. コーンであった[(50)]。派生するナショナリズムの種類があまりにも多様なために、ナショナリズムの一般概念を利用するほうが都合がよいとするスミスも、「西欧型」の市民的・領域的ネイション・モデルと、「東欧型」のエスニック的・系譜的ネイション・モデルとに分類する。この区別から次のような二つのナショナリズムに関する基本論理が導き出せるという。市民的・領域的ネイション・モデルは、ある種のナショナリズム運動を、すなわち独立以前における反植民地運動と独立以後における統合運動を招来する傾向があり、他方、エスニック的・系譜的ネイション・モデルは、独立以前においては分離主義的またはディアスポラ的な運動を、それ以後は領土統一主義、あるいは汎運動を発生させる傾向があるという基本論理である。ネイションのエスニック概念とも呼びうる東欧型のネイション・モデルは、自らの生まれた共同体や土着文化を強調する点において西欧型のものと異なるが、この点においてアイルランドのそれは西欧にありながら東欧型ネイション・モデルに当て嵌まると考えられる。東欧型に属する集団、つまりエリートのみならずさまざまな階層によって共有される垂直的・民衆的であるエトニーは、より大きな帝国的権力によってその運命が決定されるような従属的な集団である。アイルランドと英国の関係のように、これらは宗教的な境界線上にある共同体であり、別の

宗教を信じるより強い力を持つ集団の直ぐ近くにしばしば存在するものである。垂直的共同体からネイションを築こうとするエスニック的・系譜的モデルでは、排除されつつある知識階級（アイルランドではアングロ・アイリッシュ支配階級）は土着の文化資産を用いて、文化的ネイションへと他の階級を誘引しようとする。ここで、このモデルの独立以前の分離主義的な運動について、スミスがどのように分析しているかを見てみよう[51]。分離主義的なエスニック・ナショナリズム運動の目標には、

1　それまでに存在しなかった文学的に「高い」文化を、その共同体のために創造する。
2　文化的に同質で「有機的」なネイションの形成。
3　認識しうる「故国」と、できならばその共同体にとっての独立国家を確保すること。
4　これまで受動的であったエスニーを、活動的なエスノ政治共同体、「歴史の主体」へと転換すること。

これらの四項目が共通して含まれるとスミスはいう。それぞれの民族史（「エスノ・ヒストリー」）の存在または発見が、これらの目的を追求する土台にあるのだが、民族史の利用は本質的には、社会的であり文化的なものでもある。ナショナリスト自身にとっては、自らの過去を探求すること自体に興味があるわけではなく、「自らの民」にかんする地域の過去の神話を再び借用することに関心を示すのに過ぎないのである。その過程の基礎には、受動的なエスニーをその地に根ざした方法で動員し、「詩的空間を開拓」し「黄金時代の賛美」を通じて文化遺産を「政

治化」することがある。

さて、このような再発見・再構築から利益を得るのは誰か？当然ながら、新たに見出された共同体のために、その専門的な技能を提供するデラシネ（故郷喪失者）たる知識階級自身である。また、彼等はその構成員を動員しようと、蘇らせたエトニーの「現存する過去」にしきりに参加したがるのは、社会的地位と政治的権力を追求するためである。が同時にそうすることで知識階級は、自らと「自分達の」多くのエスニック住民との間にある溝を埋めようと努力する。ここで重要なことは、この再構築された民族史に回帰することから得られる恩恵が、動員されたエトニーの構成員全般に及ぶということである。このコンテキストにおいて、アイルランドのプロテスタント=アングロ・アイリッシュ支配階級を一種のデラシネである知識階級と見立ててみると、アイルランドの文芸復興とその運動を主導した彼等の立場が非常に巧く説明されるように思われる。ただ、これまでの諸家の説明に見られるように、ナショナリズムという信条の文化主義的な傾向というべきものは、政治的関与が芸術的傾注に取り変わっていくというのが一般的であるのだが、十九世紀のアイルランドでの国民のアイデンティティを確立する闘争は、政治的かつ文化的なものであり、コインの裏表のような相互依存の関係にあった。いや、むしろアイルランドにおいては、文化は政治的なものの源であったということに、そのナショナリズムの特徴を覗くことができる。

4. アイルランド・ナショナリズムと文学

フランス革命に刺激され、また、英仏の交戦状態という間隙を突いて、ダブリンの法律家であったウルフ・トーン（Wolfe Tone）が、援軍

となるフランス軍の艦上から英国への反乱の叫声を上げたのは1998年の晩秋であった。同年の春に始まっていた「ユナイテッド・アイリッシュマン」（United Irishmen）の蜂起と呼ばれるこの騒乱は、アイルランドで幾度か起こるこの種の事件のなかで最大のものであり、主導した少数派のプロテスタント（主に中産階級）がカトリックと連携・連帯した唯一の闘争であった。反乱はおよそ三ヶ月に渡りアイルランド各地での散発的な戦闘を繰り広げた後に、二万人とも三万人ともいわれる犠牲者と、死罪を言い渡されていたトーンの自決という結果に終わる。これより前にトーンは既に1891年の十月と十一月にそれぞれベルファストとダブリンに「アイルランド連合協会」（Society of United Irishmen）を立ち上げていて、民主改革（議会改革）やアイルランド事情への英国の不介入というスローガンを掲げていた。しかしながら、トーンがカトリック解放などのカトリックの大義を取上げたことには、彼等の苦悩を取り除きたいがためではなく、本当はその不満を革命の水脈へと向かわせようとの思惑があった。トーンはカトリックを利用しようとしただけであって、実際は彼等のことを理解してはいなかったのである[52]。彼はプロテスタント、カトリック、非国教徒という宗門による呼称の代わりに「アイルランド人」（Irishman）という共通名を使おうと盛んに訴えていた。とはいえ、たとえ文脈によっては（十七世紀の植民者である）プロテスタントは自らを English、カトリックを Irish と称することがあっても、こと国制に関する限りにおいては、the Irish people とはプロテスタントのことに他ならなかった。Irish であることがローマ・カトリック教徒であるという想念は、（アイルランドという）国家が彼等のものであるということと同様に、トーンにとっても全く受け入れられるものではなかった。

ナポレオン戦争でイギリスの優位を保つためには、ユナイテッド・アイリッシュマンの乱を惹起するような不安定なアイルランドの厳存は、時の宰相（小）ピット（William Pitt）にとって耐え難い危機の温床のように写った。そこで、彼は大ブリテンとアイルランドが統合して一つの連合王国を形成する「合同法」を1800年に成立させ、その翌年の施行を待つことにした。しかしながら、合同法は大ブリテンのために制定されたものであり、およそ大ブリテンの利益に資するものであったので、結果、両国を真に融合させることには繋がらなかった。合同後しばらくアイルランドは政治的に沈滞していたのであるが、そこに現れたのが後に「解放者」（the Liberator）と呼ばれる、カトリック教徒でありケリー州の地主出身の弁護士 D. オコンネル（Daniel O'Connell）であった。「合同撤廃」（repeal：リピール運動）とカトリックに加えられる過酷な報復にたいして、最終的に政界へ進出するしかないと奥意していたオコンネルは、先ず「カトリック教徒解放」（Catholic emancipation）の運動にその身を投じることにする。1823年に「カトリック協会」（Catholic Association）を設立するが、協会の運動を支える月一ペニーの会費「カトリック地代」（Catholic rent）の徴収という方策が功を奏して、運動は稀にみる大衆政治運動へと変貌していくことになった。オコンネルの運動の圧力に対して、最初その要求を突っ撥ねていたウェリントンも、自政権（トーリー党）の不安定さを熟察すると、ついに譲歩せざるを得なくなり1829年に「カトリック教徒解放令」（Catholic Relief Act）の成立を決断する。これによって、英国議会はカトリック教徒にも開かれることになり、翌年二月の初選挙でオコンネルは、他のカトリック代議士三十名と共にウェストミンスターに乗り込むことになった。次いで、オコンネルの目標は懸案の「合同撤廃」に向けられ、1840年に「合同撤廃

協会」（Repeal Association）を設立する。若い時分フランス革命の経過をつぶさに観察したために、非暴力を信条としていた彼の戦術は、やはり大衆を動員した「巨大集会」（monster meeting）を開催して、政府と渡り合うというものであった。ベンタム主義者であるオコンネルにとって、「正義」とはアイルランドのカトリック教徒に「最大多数の最大幸福」を実現することにあった。その「正義」はときに法的に譲歩を余儀なくさせられることがあっても、畢竟アイルランドに議会を回復することに向けられた。しかもその議会はこれまでのプロテスタント地主による独占ではなく、カトリック中産階級による専有とまではいかないとしても、少なくとも代表され構成されねばならない。オコンネルの最後の集会は、1843年にかつての聖戦の地であるクロンターフでその開催が計画されるが、軍隊を出動させた当局の強い中止命令によって頓挫してしまう。ここで、オコンネルが煽動したモンスター・ミーテングがあっけなく瓦解したのは、その平凡な議会主義にあると批判する者達が出始める。このように近代のアイルランド・ナショナリズムは、カトリック的特徴が色濃く滲み出るものとして発生したのであるが、T. イーグルトンも指摘しているように、アイルランドにおけるナショナリズムの最大の問題は、社会・経済的要求よりも政治的な要求を優先させる潮流のものと、国民的・政治的な認知をいつも得られることのなかった社会的・経済的な反乱のものとに分離していることにあった[53]。カトリック教徒解放と合同撤廃を掲げたオコンネルの運動も、大多数の農民にとって肝心の社会的・経済的要素よりも、政治的なそれに力点が置かれており、その結果として農民達が利益を得ることはなかったのである。

オコンネルのリピール運動を支援するためにカトリック協会のメンバーとなっていた者のなかに、T. デイヴィス（T. Davis）と J. B. ディロン

（J. B. Dillon）という二人の青年弁護士がいた。彼等は1842年に同年代のジャーナリストであったG. D. ダフィ（G. D. Duffy）と出会い、共同で週刊紙『ネイション』（*The Nation*）を発刊することに同意する。次の詩は、この時期の最も優れた愛国詩人であるJ. C. マンガン（James C. Mangan）の‘*The Nation's First Number*’という作品の初節であるが、その題名どおり『ネイション』紙の第一号の発刊を記念して掲載されたものである。

‘Tis a great day, and glorious, O Public ! for you—
This October Fifteenth, Eighteen Forty and Two !
For on this day of days, lo ! THE NATION comes forth,
To commence its career of Wit, Wisdom, and Worth—
To give Genius its due—to do battle with wrong—
And achieve things undreamed of as yet, save in song.
Then arise ! fling aside your dark mantle of slumber,
And welcome in chorus THE NATION'S FIRST NUMBER.(54)

『ネイション』紙を企画したこの三人が、オコンネルを尊敬しながらも、彼のカトリック聖職権主義（clericalism）を信奉しあくまでも議会主義を貫く姿勢への蟠りから、「青年アイルランド党」（Young Irelanders）を結成するのも同じ年のことである。『ネイション』紙刊行の目的は、当然のことながら「合同撤廃」にあったが、青年アイルランド党はオコンネルの立憲主義を手ぬるいと感じながらも、彼のリピール運動を支えていくなかで、場合によっては武力に訴えてでも、英国からアイルランドの自由を奪取するとの議論を展開していく。ここに、オコ

ンネルに代表され後にパーネルへと繋がる立憲的ナショナリストの系譜と、J. ミッチェルやJ. F. ローラーに代表される青年アイルランド党の左派、さらに1850年代末に始まるフェニアン運動（Fenianism：武装蜂起による独立を目指す）や1916年の「イースター蜂起」（Easter rising）に連なる少数派の革命的ナショナリストのそれとの分化が認められる[55]。デイヴィスは、アイルランドが文化的な自信を回復しなければ、十分な工業的発展の可能性は見出しえないのであり、このことはアイルランドがイギリスからの政治的に分離することによってはじめて成し遂げられると考えていた。『ネイション』紙は回覧講読されて、飛躍的にその発行部数を伸ばし二十五万の読者へと膨らんでいく。ここに、アンダーソンがいみじくも主張するナショナリズムと出版文化との結合がみられるが、アイルランドでは、自らを「民族的な」あるいは「ナショナリスト的」と称する新聞の数は1871年の時点においては一紙だったのが、1881年には十三紙、さらに1891年には三十三紙にまで膨れ上がる[56]。

ところで『ネイション』発刊に先立つ四年前にデイヴィスは、ダブリンの「トリニティ・カレッジ」の歴史協会会長に就任している。ナショナルな意識を高揚させる手段として、アイルランドの歴史の研究を絶えず推奨していたデイヴィスは、教育のあるプロテスタントの子弟にむかって、歴史的なアイルランド国家の来るべき再生を迎えるに当たって、愛国的な前衛として行動するようにと檄を飛ばしていた。彼はアイルランドの歴史のなかから自由のために戦う民族の物語を汲み出すのであるが、提示される歴史はかなり単純に歪曲され、昔のアイルランド人の戦を、その時代の概念としては存在するはずのない「国家独立」の戦とするのである。例えば、よく詩作をしていたデイヴィスの最良のものとし

て揚げられる‘*Lament for the Death of Owen Roe O'Neill*’であるが、この作品のなかで（その死が報告される）主人公のオゥエン・ロウは、アイルランドの自由のために英国軍と戦う愛国の英雄として取り扱われている（Had he lived—had he lived, our dear country had been free;/ But he's dead—but he's dead, and 'twas slaves we'll ever be.）。しかし「アイルランド同盟戦争」（Irish Confederate War, 1641–53）へのオゥエン・ロウの参加の真意は、英国（王党派、議会派）とスコットランド長老派との抗争、加えてゲール族長達の騒擾が渦巻くなかで、あわよくば1607年に起こった所謂「伯爵の逃亡」によって失われた伯父である第二代ティローン伯ヒュー・オニール（Hugh O'Neill, 2nd earl of Tyrone）の領地を回復することにあった。また、感嘆符と疑問符に溢れるこの詩にあって、オゥエン・ロウはイギリス人によって毒殺されたということになっているが、これもアイルランドで古くから語り継がれてきた俗伝に過ぎない。デイヴィスを含めた青年アイルランド派は、総じて、ナショナルな権利を要求する根拠として、ロマン主義的な文学者や歴史家の諸例を利用するのであるが、これらを（どの国においても常套手段であるが）過去から適宜発掘してくるのである。

『ネイション』紙の第一号に掲載された「趣意書」では、今や新聞の使命は、民衆の心とあらゆる党派の教育を受けた人々の共感を、国家の独立という究極の目的に向けることにあるといった声明がなされている。さらに、ユナイテッド・アイリッシュマン騒乱のときのトーンと同様に、アイルランドの‘国民性’はプロテスタントとカトリックと非国教徒の全ての集団、加えてミリージアン（Milesian：スペインから渡ってきてアイルランド人の祖先となった神話上の人々）やクロムウェル派を含む、あらゆる世代のアイルランド人によって構成されねばならない

ということが謳われている。その根底にはデイヴィスの出自、父はイギリス人であるが、母はゲールのオサリバン・ベア家（O'Sullivan Beare）と婚姻関係を持つクロムウェルの家系の血を引いているということがあるかもしれない。それはともあれ、次に上げる『ネイション』紙に掲載されたデイヴィスの詩‘*Celts and Saxons*’は、そうした彼の考えを表明したものである。冒頭の部分は、次のように

We hate the Saxon and the Dane,
　We hate the Norman men—
We curs'd their greed for blood and gain,
　We curse them now again.
Yet start not, Irish born man,
　If you're to Ireland true,
We heed not blood, nor creed, nor clan—
　We have no curse for you.

書き始められている。新しいアイルランド国民を形成するためには、アイルランドは Celtic ではなくて Irish でなければならない。このことは上掲のスタンザを受けて、

As Nubian rocks, and Ethiop sand
　Long drifting down the Nile,
Built up old Egypt's fertile land
　For many a hundred mile;
So Pagan clans to Ireland came,

And clans of Christendom,
Yet joined their wisdom and their fame
To build a nation from.

Here came the brown Phoenician,
The man of trade and toil—
Here came the proud Milesian,
A hungering for spoil;
And the Firbolg and the Cymry,
And the hard, enduring Dane,
And the iron Lords of Normandy,
With the Saxons in their train.[58]

と謡われる。他所においてもデイヴィスは、この「ゲール人の茫洋としているが電光石火の才覚、サクソン人の峻厳な力、ノルマン人の先見的洞察」[58]の結集という発想を、以前に述べたアーノルド的見解さながらの語句を連ねて述べている。こうしたことから分るように、デイヴィスを始めとする青年アイルランド党は宗教に関してもおおむね寛容で多元主義的であった。「クイーンズ・カレッジ」の創設の場合に見られるように、彼等は各宗徒の混成教育も支持しており、ただ狂信的なカトリック至上主義に断固として反対したのであって、政治的な見地からも彼等がとりわけラディカルであるということではなかった[59]。このように、デイヴィス風のロマン的ナショナリズムは、アイルランドにあっては異なった意味、文化的、言語的純粋さを主張するより、過去の植民地の時代からの成り行きである文化の混交を反映するものとなる。ところ

が、彼が提唱するカトリックとプロテスタントの自由・対等の提携は、抗争によって甚だしく分裂した政治的秩序のアイルランドでは、ほとんど実現性のないものであった。アングロ・アイリシュのプロテスタントはそのアイデンティティを失わずに、異なる伝統のアイルランド人と協働できる場を見出さなければならなかったが、その唯一の拠り所がアイルランドの歴史、古物、文学の研究であったのである。連合前には全くそうは感じなかったのであるが、アイルランド王国の消滅がもたらされた後に始めて、アングロ・アイリシュはナショナルな責任感に目覚めたといえる。そして、歴史・社会・自国の風景のなかに、政治的用語では決して表現できないIrishであるという意識を、文学的テーマにおいて探求し始めたのである。文学を国民の政治意識を高揚させるプロパガンダとして利用するというわけであるが、デイヴィスにとっての文学は、政治的事実に純然たる血肉を与えるものとなり、そのことによって政治的行動はより身近なものになっていった。この意味において、文学は理念と政治との媒介者となっていくのであるが、特にゲール文化の数少ない生き残りであるバラッドが着目された。当面の成功の原動力となるのが、『ネイション』紙上の多くのコラム欄を飾ったバラッドや歌謡であり、ナショナリティの原理を民衆に教え込む手段としてそれらを大胆に利用することを着想したのが、デイヴィスとギャバン・ダッフィの両名であった[(60)]。

1843年の三月にこれまでに『ネイション』紙に掲載された詩歌やバラッドを集めた『国民の精神』（*The Spirit of the Nation*）という詩集が出版される。アイルランドの歴史を内容とする（青年アイルランド党を意識した）『アイルランド叢書』（*The Library of Ireland*）を後日に刊行するJ. ダフィ（James Duffy）をその編者として[(61)]、一冊六ペンスという

安価で発売された。翌年の秋に第二部が出されるのであるが、その年の春には『国民の精神』は、合同以降アイルランドで出版されたいかなる本よりもその発行部数を既に上回っていた。「1845年度版の序文」には、この『詩集』の成功は「服従と憎悪と偏狭性に代わる、男らしさと、連帯とナショナリティという新しい季節の萌芽」としてアイルランドの友に迎えられ、「ナショナルな党派の決断と自信」を敵に示したとある[(62)]。ここで典型的な『国民の精神』の基調を奏でる作品を、1845年度版のなかに瞥見してみよう。

“Hope no more for Fatherland,
　All its ranks are thinned or broken; ”
Long a base and coward band
　Recreant words like these have spoken,
　But WE preach a land awoken;
Fatherland is true and tried
　As your fears are false and hollow:
Slaves and Dastards stand aside—
　Knaves and Traitors, *FÁG AN BEALACH !* [(63)]

これはC. G. ダフィの作品の初連であるが、タイトルともなっているこの詩の各連の末尾で繰り返されるゲール語 *FÁG AN BEALACH !* は、「道を空けろ」という意味であり、コノハトやマンスターの部族の者が、市場などで抗争を始めるときの啖呵であるという。何とも勇ましい様子が、平易にまた安直といっていいほど簡明に吟じられている。次に、トリニティ・カレッジ出身の弁護士 E. ウォルシュ（Edward Walsh）

の‘*The Songs of the Nation*’という作品の最初の部分は、

YE songs that resound in the homes of our island—
That wake the wild echoes by valley and highland—
That kindle the cold with their forefather's story—
That point to the ardent the pathway of glory ! —
Ye send to the banish'd,
O'er ocean's far wave,
The hope that had vanish'd,
The vow of the brave;
And teach each proud despot of loftiest station,
To pale at your spell-word, sweet Songs of THE NATION ![64]

というようになっていて、C. G. ダフィの詩と同様に、最終連まで同じような調子が続いていく。偶々選び出した上二例からもわかるように、ダッフィは『国民の精神』の特徴を出すために、男性らしく威勢がよく情熱的な希望を盛り込んだ作物を意図的に選び出し、アイルランドの歴史の過去における失敗や悲劇よりも、もっぱら好戦的な高揚感や歴史的栄光を謳い上げる作品をもって編纂に当たっている。これはT. ムア（Thomas Moore）の『アイルランド歌曲集』（*Irish Melodies*）が奏でる‘失われたものへの嘆き’の調子と好対照をなしている。しかし、『国民の精神』に所載された（三十余人の作者による）150篇に達しようとする詩群は、現在編まれている「アイルランドの詩歌」のアンソロジーなどには、最前に触れた‘*Lament for the Death of Owen Roe O'Neill*’を含むデイヴィスの数編を除いては、殆んど取上げられることはない。

『ネイション』紙に掲載されたなかで最も人口に膾炙されている詩の一つに、マンガンの‘*Dark Rosaleen*’がある。この愛国的な詩の制作にあたってマンガンは、J. ハーディマン（James Hardiman）が編集した『アイルランド吟遊詩集』（*Irish Minstrelsy,* 1831）のなかの‘*Róisín Dubh*’（*Little Black Rose*）を参考にしたとされている。公文書館に勤務していたハーディマンは、古今に渡るゲール語の詩歌（写本と口承）を収集し、それを数名の助手に翻訳させて『アイルランド吟遊詩集』二巻を上梓していた。その編纂の目的には、アイルランドの詩歌はギリシャ・ローマの古典に劣らないほどの価値があり、このような貴重な遺産を荒廃に追い込んだのは英国のアイルランド政策の所為にある、というナショナルな含みがあった。ハーディマン自身の念頭には、オコンネルのカトリック解放運動を後押しする心算があったのである。『吟遊詩集』では‘*Róisín Dubh*’は、T. ファーロング（Thomas Furlong）によって翻案されるのであるが[65]、ハーディマンに従うと、現今ではみたところ悲しげな恋愛歌‘*Róisín Dubh*’は、実は強い政治的感情が織り込まれた寓意的なバラッドとなる。エリザベス女王統治末期に作られたこの小曲は、アイルランドの英雄ヒュー・オドンネル（Red Hugh O'Donnell）が亡命しているスペインからアイルランドを救出してくれることを待つ乙女の姿を歌うものであり、従ってこの恋人である乙女は当然アイルランドを意味するものと解釈される。ここで、マンガンの‘*Dark Rosaleen*’の初連と最終連を引用するが、

O my Dark Rosaleen,
　Do not sigh, do not weep !
The priests are on the ocean green,

They march along the Deep.
There's wine …from the royal Pope
Upon the ocean green;
And Spanish ale shall give you hope,
My Dark Rosaleen !
My own Rosaleen !
Shall glad your heart, shall give you hope,
Shall give you health, and help, and hope,
My Dark Rosaleen,

O ! the Erne shall run red
With redundance of blood,
The earth shall rock beneath our tread,
And flames wrap hill and wood,
And gun-peal, and slogan cry,
Wake many a glen serene,
Ere you shall fade, ere you shall die,
My Dark Rosaleen !
My own Rosaleen !
The Judgement Hour must first be nigh,
Ere you can fade, ere you can die,
My Dark Rosaleen ![66]

ファーロングのものと比較してみると、はるかに*意図的*に愛国的な色彩が施されていることが見て取れる。

ハーディマンの『アイルランド吟遊詩集』に噛み付いたのがS.ファーガソン（Samuel Ferguson）である。後に「王立アイルランド学士院」の院長に推されことになる博学のファーガソンは、詩人であり古代アイルランド伝説の英訳が高く評価されるケルト語学者でもある。彼はオグレイディと共に‘ファーガソンからアイルランドの英雄伝説のほとんどを学んだ’と、イェイツにも言わしめるほど文芸復興にも深い影響を与えた人物である。ファーガソンの『アイルランド吟遊詩集』の文学的な欠陥を突いた手厳しい批判は、『ダブリン大学誌』（*Dublin University Magazine*）に四回に亘って連載され、その最終回は原文を忠実に写したファーガソンの自身の訳で締め括られた。クレア州のコステロという神父によって十七世紀に作られたとされる‘*Róisín Dubh*’は、ファーガソンによると、或るカトリックの神父が恋人である‘黒バラ’と結婚するために、法王からの特別の許可状を待ちわびる恋愛歌ということになる。マンガンには‘*Róisín Dubh*’の別ヴァーションもあって、この作詩においてもファーガソン訳を恐らく参考にしたものと考えられる。G. D. ツィンマーマンは、‘*Róisín Dubh*’はどうやら初めは普通の恋愛歌だったものに、愛国的な意味合いが被された詩だとする見方が妥当であると述べている[(67)]。いずれにしても‘*Róisín Dubh*’は十九世紀の初めの頃までには、政治的意味合いで読まれることはなかったようであり、ナショナリズムの運動の高まりとともにアングロ・アイリシュの文学によって洗練されるなかで、このような愛国的なテーマを背負わされていくのである。

確かに、ファーガソンの訳はケルト語の碩学だけあって、文学的、言語的観点からは優れていたものであったが、強靭なユニオニスト（「合同」支持者）であった自身の翻訳詩も、極めて強い政治的バイアスが懸

かることがあった。その例に挙げられるのがゲール語のバラッド‘*The Fair Hills of Ireland*’である。元々この歌はジャコバイト（Jacobite）が追放されたゲール貴族の身の上を嘆くといった趣意のものであったのが、特にその第二連目が、

Curl'd he is and ringletted, and plaited to the knee,
Uileacan dubh O !
Each captain who comes sailing across the Irish sea;
Uileacan dubh O !
And I will make my journey, if life and health stand,
Unto that pleasant country, that fresh and fragrant strand,
And leave your boasted braveries, your wealth and high command,
On the fair hills of holy Ireland.(68)

となっているように、新しい頭領がアイルランドに到来することを祝福した歌に掏り替えられている。まるで古い時代の英雄達が、この時代のプロテスタント指導者の政治的必要性に合致するように、また大衆的カトリック民主政治の貴族的指導者の原像であるかのように描かれている(69)。このようにファーガソンにおいても、弱体化したアングロ・アイリッシュの支配階級が、古代の英雄のようにこの国の指導権を振るうことを期待したオグレイディと同様の態度がみられるのである。ファーガソンは「植民地主義は愛国主義の証である」といってこの詩の解説をしたようであるが、アングロ・アイリシュの利害に一致するように、ゲール文学を植民地化することが、彼の後期の文学活動となっていく。

5. プロテスタント・アセンダンシーの凋落

そもそもプロテスタント・アセンダンシーという用語は、1780年代にカトリックへの政治的・宗教的自由を拡張しようとする動きに対して、プロテスタント保守派が感じた国政上の危機感に由来している[(70)]。初めプロテスタント土地所有者階級の支配的立場のことをもっぱら表す言葉であったが、後にその範囲を漸次拡張していくことになる。つまり多数派のローマ・カトリックに対する、アイルランド国教会の構成員（長老派や非国教徒は必然的に除かれる）や知的専門家なども加えた、一種のカーストとしてのプロテスタントの優位性のことを意味するようになる。土地所有のエリート階級のカトリックに対する優位という本来的な意味と共に、危機的な変化が到来したときにその支配に不安を感じる（想像された）プロテスタント・グループのことを名指しするものとして使用されるようになるのである。アイルランド全体から見て人口の二割にも満たないプロテスタントのアングロ・アイリシュが、残り八割のローマ・カトリックを支配することの翳りをもたらす最初の契機は、先述したように、オコンネルの尽力による「カトリック解放令」（1829年）の成立によって、カトリック教徒に英国議会への道が開かれたことにあった。カトリック大衆に対して自分達のほうが優れているというアングロ・アイリシュの過去からの自信が、数の上での圧倒的な不足を穴埋めし、アイルランドの命運においても同様の主張をしても当然だ、という不撓の優越感に揺らぎが生じ始めるのである。アイルランドには五議席が割り当てられた1832年の「選挙法改正」（Reform Act）の後を受けて、1840年には地方議会の改正が行なわれる。北のアルスターは別として、南の三地域（レンスター、マンスター、コノハト）は元々プロテス

タントが少ないところであり、本国議会への影響も期待できない地域であったが、この地方議会の改正がプロテスタントの市町村での長きに及ぶ独占を打ち破ることになる。これを期に政治政策の影響力が、次第にプロテスタントからカトリック側の優位へと移行し始めるのである。さらに、1830年代の「十分の一税戦争」（Tithe War, 1830–3）などの問題を引きずっていたために、グラッドストーンによって断行された1869年の「アイルランド国教会」（Church of Ireland）の廃止は、表面からは見受けられない重要な事態をもたらすことになった。これは最初の明白なカトリック・ナショナリズムの要求への屈服であり、イギリス政府がアングロ・アイリシュを見捨てる最初の第一歩となった。信者数が少ないとはいえ、南の三地域のプロテスタントを糾合していたのは、政治組織や指導者ではなくアイルランド国教会であったのである。さらに1872年の秘密投票の導入が、彼等の後退に拍車を掛けることになる。決定的となるのが、十九世紀末にパーネルによって指導され三次に渡って農民と地主の間で繰り広げられた「土地戦争」（Land War）である。ナショナリズムは近代の都会の現象であるといえるが、アイルランドにあっては農村社会とその感情が色濃く投影されている。例えば、地主は正当な土地の所有者から力ずくで奪い取った異邦人の簒奪者であり、抑圧者であるといった心情は遥か以前から抱かれていて、とりわけ「大飢饉」（the Great Famine, 1845–9）以来は揺るぎのないものとなった。都市に隣接する農村社会の構造が、ナショナリズムの性格を形成するのに深い影響を及ぼした、という見方をするのはネアンである。農業革命によって農民社会が破壊していたイングランドやスコットランド低地と違って、アイルランドでは十九世紀の土地改革運動が地主達の勢力を弱めた結果、小農が強い結束力を誇る農村社会が形成された。そこに農民特有な感情

がナショナリズムに流入し、土地戦争で噴出したように激化していくことになったというのである[71]。皮肉なことにアセンダンシーという語は、この「土地戦争」よってプロテスタントの土地所有者が消滅しようとする段になって、ある種のスローガン的な感情を伴って使われるようになる。そしてアセンダンシーを遂に消亡に追いやるのは、「ウィンダム土地法」（Wyndham's Land Act, 1903）と「ビレル土地法」（Birrell's Land Act, 1909）の二法であるが、これらの法律によって多くの農民が土地を取得できるようになる代償として、プロテスタント地主制が実際上解体させられることになった。

さて、I. バット（Issac Butt）が先鞭をつけた「自治問題」は、アイルランドは連合王国内に留まって、あくまでも議会主義に則って、アイルランドの内政問題に限っての自治を要求するものであったが、1870年代以降自治問題はその概念の曖昧さもあって、陣営によってさまざまに解釈されるようになる[72]。例えばこの事案は、アイルランド国教会廃止後のプロテスタントの上・中流階級には大いに魅力的に写ったようであるし、フィニアン（Fenian）にとってはこれを切掛けとしてアイルランドの独立を獲得する突破口になるように思われた。この言葉の曖昧さを隠れ蓑にすることによって、フィニアンと「新しい出発」（New Departure）を取り決めていたパーネルは、バットの考えを基本としたグラッドストーンの自治法案を強力に支援することができたのだともいえる。ところで、バットが提案した帝国内での改革としての自治権の要求は、アイルランドでの騒乱や離反の動きを抑制することを内包していたので、あくまでもアングロ・アイリッシュの支配の権威と帝国による支配をより強固にするものであった。自治問題は凋落しつつある土地所有者、すなわちプロテスタント・アセンダンシーとっては、「ユニオニ

ズム」（unionism）のそれに変貌して取沙汰されることになる。ユニオニズムは1801年の「合同法」以来のグレート・ブリテンとの政治的統一を継続することに賛同する主義であるから、パーネル（裕福なプロテスタント土地所有者の出身）が推進する自治法案には当然ながら反対する立場にある。一般的には、ほとんどユニオニズムの信奉者（ユニオニスト）はプロテスタント的なバックグランドを持っており、ナショナリストはカトリックのそれを持つという図式がある。ユニオニスト（アングロ・アイリシュ）はアイルランドが自分達の国であると考えており、その支配を維持し続けるために、自分達を支援することを長年イギリスに求めてきた。彼等はイギリスとの関係を保つことこそが、アイルランドの福利に繋がると信じていたのである。オグレイディやファーガソンは自治問題に反対することが愛国的な義務であると考えていたが、英本国との連合によって、アイルランドの繁栄のみならず彼等自身の安全が図られると思っていた。また、アイルランドがイギリスとの関係を絶つことは経済上の大破綻をきたすというユニオニストの見解は、十八世紀のバーク以来一貫した信念ともなっていた[(73)]。プロテスタントが多数派を占め、最も工業化が進んでいたユニオニズムの首魁であるアルスター地域と同様に、南の三地域も同様な目的、「自治法案」の適用にたいする議会提案を廃案に追い込むという共通の目的があった。この狙いが功を奏さなかったことが、両者の離反の要因となるのだが、このことが、プロテスタント・アセンダンシーのこの国で果たす重要な役割への最後の希望を打ち砕いたのである。

このような経過を辿るなかで、衰退しつつあるプロテスタント・アセンダンシーは、今やアイデンティティの喪失の危機に立たされて、消えかかっているゲール文化の遺産の残り火を掻き立て、その命の最後の灯

火を掲げたといえる[74]。最終的にパーネルに引き継がれることになるが、カトリックの貧農の出身でフィニアンのM.ダヴィッド（Michael Davitt）が、1887年に「土地同盟」（Land League）を創設する。このように政治的機運が高まるなか勃興しつつあるナショナリスト階級も、自らを正当化してくれる歴史的シンボルを必要としていた。さらに、ナショナル志向のアングロ・アイリシュのプロテスタントにとって、公正不偏の態度を取れば取るほど自分達の政治的なコミットメントを危うくさせることになるので、彼等はあらゆるアイルランド人とって共通の基盤となる国民文化を模索することによって、国民的な差異を解消し、しがらみとなっている階級的特権や守旧政治からの注意を逸らそうとした。ここにおいて文化はまさしく社会の矛盾を解消するものとなる。文芸復興派とともにアセンダンシーは文学の領域も牛耳るようになるが、文化をカトリック・ナショナリストに供給することが、アセンダンシーの役割となった。換言すれば、プロテスタント・アセンダンシーは、アイルランド・ロマン主義の鍵となり、その特徴的モチーフとなるゲール世界の残滓への感覚を研ぎ澄ましたのである。そして自らの社会的・政治的ヘゲモニーが低下するなかで、その感覚を新しい文化的基盤を構築することを期待させるものとして働かせたのだといえる。その一方、カトリック陣営も、これまで受けてきた心的外傷からの脱却を果たすために、ゲール世界の高揚しつつある政治的自信の媒体としての文学を必要としていた。

十九世紀の末になってもアイルランドではロマン主義といったものが未だ健在であった。英国本国においては、この世紀半ばまでには詩的なものと政治的なものの対立は既に規定し直されていた。というのも文化とは精神的な力そのものなので、政治的、経済的なものについて語ると

きには、芸術として超越した場所から語ることになっていたのである。ところが、イーグルトンも論じているように、アイルランドにあっては、文化が政治的かつ党派的なものであることは自明なこととされていた[75]。とはいえアングロ・アイリッシュは文化の不偏不党性により問題の解決を表面的に図っただけで、既得権を失いつつあった支配階級の派閥的な立場を述べているに過ぎなかったのである。こういう訳であるから、プロテスタント・アセンダンシーからのアイルランドにおけるヘゲモニーにたいする要求は、すべてが遅きに失していたということになる。

6. ナショナリズムとイェイツ、そして再び文芸復興

6. 1. アセンダンシーとしてのイェイツ家

イェイツの家系を手繰ってみると、十七世紀の中頃にイギリスのヨークシァーからアイルランドに渡ってきたと推測される、ジャービス・イェイツ（Jervis Yeats）という人物に行き当たる。彼はダブリンでリネンの商いに携わり、またウィリアム王戦争に参加したという経験があるともいわれている。イェイツの『自伝』の『少年・青年時代の夢想』（*Reveries over Childhood and Youth*）のなかで語られている、ジェイムズ王の軍隊に捕らえられるが、後にワイルド・ギースでその名を馳せるP. サースフィールド（Patrick Sarsfield）に恩返しとして助けられた先祖のものとは、このジャービスのことかもしれない[76]。ジャービスの息子ベンジャミンと同名の孫もまたリネン卸売の家業を継いでいるが、三代目になるとかなりの羽振りを利かせるようになって、バトラー家の血筋を引く

メアリー・バトラーと結婚することになる。バトラー家といえば、その先祖をヘンリー２世と一緒にアイルランドに渡来したアングロ・ノルマンにまで遡ることができる血統の家であり、その子孫の一人が十四世紀に（オーモンド）伯爵を名乗ることが許されるほどの家門である。以来、イェイツ家の嫡男にはミドル・ネームにバトラーが付けられるようになる。イェイツの曽祖父の娘であるメアリー・イェイツの家の食堂の暖炉の戸棚には、三代目のベンジャミンがメアリー・バトラーと結婚したときの美しい銀杯があり、その杯にはバトラー家の家紋と花婿と花嫁のイニシャルが刻まれているということが、やはり『少年・青年時代の夢想』のなかに懐かしげに、また半ば自慢げに語られている(77)。イェイツは自分の中に僅かながら流れている貴族の血を随分と誇りにしていたようであるが、後に詩‘*Upon a House Shaken by Agitation*’において、貴族的精神を高揚させるトポスであったグレゴリー夫人の「クール荘園」（Coole Park）の荒廃を、自らが貴族であるかのように嘆いてみせている。三代目のベンジャミンの息子、イェイツの曽祖父に当たるジョン・イェイツ（John Yeats, 1776–1816）は、スライゴーのドラムクリフ（Drumcliff）の牧師職をその死まで勤め上げるのであるが、その息子のウイリアム・バトラー・イェイツ（われらがイェイツと同名）もまたアイルランド国教会（低教会派）の教区牧師となる。一方、イェイツの母方のポレクスフェン家は、コンウォールからやって来たアングロ・アイリッシュの末裔であり、海運と製粉業などを手広く営んだ裕福な家眷であった。祖父に当たるウィリアム・ポレクスフェン（William Pollexfen）は、共同の事業者であったウィリアム・ミドルトン（William Middleton）の娘であるエリザベスと結婚するが、その間に生まれたスーザンがイェイツの母である。イェイツがアイルランド民話や妖精譚に

興味を持つようになるのは、ミドルトン家とポレクスフェン家の人々によってである。この両家は共に商才に長けており、イェイツ家の者達は特にその富を鼻にかけているようなポレクスフェン家を嫌っていたと、イェイツは回想している[78]。このような逸話もアングロ・アイリシュのアセンダンシーに属するイェイツ家の零落振りと、それと相反する矜持を表すものと思われる。

6. 2. J. オリアリーとの出会いとナショナリズム

イェイツにナショナリズムを指南したのはJ. オリアリー（John O'Leary）であった。その邂逅の瞬間から、'オリアリーとの出会いと交流からあらゆる自身の活動の展開が始まった'[79]と後に述懐するほど、イェイツはこのフィニアンの老闘士の高雅な気品（'the Fenian, the handsomest old man I had ever seen'）に魅了されてしまう。オリアリーは1865年のフィニアンの蜂起計画が発覚した際に首謀者の一人として逮捕され、懲役二十年の刑を受ける。「恩赦法」（Amnesty Act）によって釈放されるまでの九年間の過酷な獄中生活に耐えた後、十余年に渡ってパリでの亡命生活を余儀なくされるが、1885年の始めに晴れて自由の身となってダブリンに戻ってきたのである[78]。同年、「青年アイルランド協会」（Young Ireland Society）の議長に就任したオリアリーは、協会に集まってきた若者達に、四十年代から展開されてきたアイルランドのナショナルな運動の継承と、それを支えるアイルランド文学の創出を熱っぽく語っていた。彼の信念には、いかなる国の人民も自己のアイデンティティを持たずして真の独立を勝ち得ることはできないのであり、文学こそがそれに最も貢献するものであるということがあった。オリアリーにとっては、世界文学に精通することが革命的徳目と同じように大切

なことであり、アイルランド詩はナショナルであらねばならず、アイルランド・ナショナリズムは詩的でなければならなかった[81]。このように、その情熱を文学に向けるオリアリーの家には、当時における最良の蔵書が備えられていた。出会いの瞬間からイェイツの才能を見抜いた彼は、将来のアイルランド文学を担う旗手に、その膨大な書籍の閲覧を許すほどになる。最初、オリアリーからイェイツに手渡されたのが、デイヴィスと青年アイルランド党員の筆になる詩集であった[82]。しかしながら、オリアリー自身もデイヴィスの詩は自分自身を愛国者にするにはしたが、その作品はあまり良いものとはいえないと認めていたのである。実際、フィニアンの機関紙『アイリシュ・ピィープル』（*The Irish People,* 1863年発刊）のコラムには多くの詩が読者から寄せられていたが、編集者のオリアリーは‘下手な詩でも愛国的なものならばお構いなし’といったことが罷り通る風潮に異議を唱えていた[83]。とはいえ、十九世紀の後半において、『国民の精神』は愛国的詩人にとってのモデルとなっていたことも確かである。青年アイルランド協会の一員として名を連ねていたイェイツも、詩作するときにあって「民衆一般の思想から常に詩作する」ものとして、直ちに協会に属する詩人として認められたいと望んだために、デイヴィスやマンガンのバラッドに大いに刺激されることもあった。ところが、世紀の最後の十年間になって、イェイツを始めとする若い詩人達は、青年アイルランド党員による愛国詩が、いつまでも歌い続けられることについて疑問を抱くようになる。イェイツは愛唱される民衆的な愛国詩の伝統は、青年アイルランド党の運動によって継続されたものであり、今後も維持されねばならないと理解はしていたが、青年アイルランド協会での言動とは裏腹に、内心では『国民の精神』のなかの大半が拙劣な作品であるとの評価を下していた。当然な

がら、イェイツらが愛国主義によるものでない詩的発想のことを口にするやいなや、そのような詩人は無責任な詩人であると非難されたのである。これに関しては、『瑪瑙の彫琢』（*The Cutting of an Agate*）の『詩と伝統』（*Poetry and Tradition*）なかで、新聞でG. D. ダフィの死亡の記事を知ったイェイツが、「死の床にあったC. G. ダッフィ卿は、彼のお気に入りの青年アイルランド運動の愛国詩のなかでも最も下手な詩を朗誦したとのことだ。これで思い出されるのが、彼こそがわれわれ一派に反対した連中の張本人であった。」(84)と述べたことが思い浮かぶ。また、イェイツとダフィとの確執において、イェイツの詩眼に賛同していたL. ジョンソン（Lionel Johnson）も、イェイツとロールストン（T. W. Rolleston）とダフィで立ち上げた「アイルランド文芸協会」（Irish Literary Society）の講演で、プロパガンダ詩は国家の大義に強く報じたものであるとしても、ほとんどが下流の文学であるとの卓見を述べていた(85)。このあたりの事情は上に触れた『詩と伝統』（*Poetry and Tradition*）のなかでは、次のように

> When I saw John O'Leary first, every young Catholic man who had intellectual ambition fed his imagination with the poetry of Young Ireland; and the verse of the least known of its poets were expounded with a devour ardour at Young Ireland Societies and the like, and their birthdays celebrated. The school of writers I belonged to tried to found itself on much of the subject-matter of this poetry, and, what was almost more in our thoughts, to begin a more imaginative tradition in Irish literature, by a criticism at once remorseless and enthusiastic. It was our criticism, I think, that set Clarence Mangan at

the head of Young Ireland poets in the place of Davis, and put Sir Samuel Ferguson, who had died with but little fame as a poet, next in the succession.[86]

語られている。ところが、道徳的あるいは政治的価値によって評判を得ている詩にたいする攻撃、ことにイェイツの抗議は、青年アイルランド派の詩を金科玉条とする者達からの、予期せぬような怒りを招くことになる。逆にイェイツ達の詩も攻撃されたのであるが、それには非難を受けるだけの特別な内容であった訳ではなく、世の中で受容されている詩ならごく普通に持っているものために攻撃されたと、イェイツは憤慨している。単に、青年アイルランド派の好むレトリックが不足しており、彼等の主義主張を熱弁し上面だけの大義を考慮することを拒んだからなのである。若気に早るイェイツはこれにすばやく応答することもあった。例えば、『自伝』の『ベールの揺らぎ』（*The Trembling of the Veil*）なかで、ゲール作家から翻訳された、また、個人的であり一般的な悲劇的経験から書かれた何篇かのバラッド以外の全ての詩（例えば、本当の恋をしている男ではなく、オコンネルの言葉に従えば、アイルランドにはこの世で最も優れた農民のいることを証明したい愛国者によって書かれた農村恋歌）を出来るだけあからさまに否定したと述懐している[87]。青年アイルランド協会との係わり合いからイェイツが改めて確認したことは、政治的行動を促す芸術は勇ましいシュプレヒコールを挙げるだけで、現実の政治状況を見据えるものではないということであった。

6. 3. キャサリーン・ニ・フーリハン

文芸復興期におけるイェイツの作品のなかで、いやその全作品のなかで最もナショナリズムに潤色されたものは、1902年に上演された劇『キャサリーン・ニ・フーリハン』（Cathleen ni Houlihan）であろう。二十世紀への節目、イェイツはA. シモンズ（Arthur Symons）の影響によってフランス象徴派詩人に触れ、自己の詩的スタイルの純化を模索していた頃である。パーネルの死後の政治的空白を埋め合わせようとする文芸復興にあって、脱デイヴィス化、つまり文学への政治的（ナショナリズム）関与を忌避することを意識していたイェイツにとっても、アイルランドの現状を見据えた場合、文学芸術を政治に触れさせないとすることは至難なことであった。ナショナルな週刊紙『ユナイテッド・アイリシュマン』（*The United Irishman*）を刊行しており、「シン・フェイン」（Sinn Féin）党を組織することになるA. グリフィス（A. Griffith）や、「アイルランドの娘たち」（Inghinidhe na hÉireann）と称する女性ナショナリストの組織を結成していた、イェイツの積年の恋人となるM. ゴン（Maud Gonne）などが、文芸復興派は自国のナショナリズムの昂揚に資する作品を上演すべきだと喧伝していた。実は、イェイツ自身も『ユナイテッド・アイリシュマン』紙に投稿した『キャサリーン・ニ・フーリハン』について、「私の主題はアイルランドであり、またその独立への苦闘である・・・それはアイルランドの大義への苦闘であり、個人的な夢や希望であるとか、我々が現世にいうところのあらゆるものを賭した、あらゆる理想的な大義への苦闘でもあるのだ」[(88)]と語っていた。かくして、1902年四月「アイルランド国民劇協会」（Irish Nationalist Theatre Society）の旗揚げ公演において、後にイェイツによってアベイ

座のマネージャーとなるL. ロビンソン（Lennox Robinson）が、観劇するものを一夜にしてナショナリストに変貌させてしまうと言った、『キャサリーン・ニ・フーリハン』がM. ゴンを主役に抜擢して上演されることになる。

『キャサリーン・ニ・フーリハン』は、その時代設定が1798年のユナイテッド・アイリシュマンの反乱時に、場所は反乱を支援するフランス艦隊が上陸するキララ湾となっている。幕が上がると、舞台は長男の婚礼を明日に控え喜びに沸く一家の場面である。そこにアイルランドの化身であるみすぼらしい老婆が現れる。「家の中によそ者が増えすぎたので」（‘Too many strangers in the house’： 英国の支配）流浪させられ、アイルランドの四州（アルスター、レンスター、コノハト、マンスター）を表す「四つの緑の畑」（‘My beautiful green field’）の「土地を取られた」のが（‘My land that was taken from me’）、長年の苦悩の種であると語る。さらに「多くの男たちが私を愛して死んだ」（‘many a man has died for love of me’）と告白する。この気の触れたかに見える老婆の戯言としか思われない台詞は、実は、男達を反乱に駆り立てる過激なメッセージとなっており、アイルランド人の観客にとっても同様の効果が伝播するように意図されている。観劇の後で「人々が出て行って、銃を撃ち合えという覚悟がなければ、このような劇を演じてよいものかと自問しながら家路についた」という感想を漏らしたのは、アイルランド文芸協会の幹事であったS. グイン（Stephen Gwynn）である[(89)]。老婆は、

They shall be remember for ever,
They shall be alive for ever,

They shall be speaking for ever,
The people shall hear them for ever.[90]

という歌を歌いながらその場を立ち去る。歌に心を奪われた長男は、花嫁となる娘の嘆願を振り切って、他の若者達と共にフランス軍に加わるために家を飛び出して行く。丁度そのとき幼い弟が港から帰ってくる。「おばあさんが歩いていくのを見たか？」（‘Did you see an old woman going down the path ?’）という父親の問に、「若い女の人を見たよ、女王みたいな歩きっぷりだったよ。」（‘but I saw a young girl, and she had the walk of a queen.’）と答えるところで幕となる。

Róisín Dubh もその一つであるが、「キャサリーン・ニ・フーリハン」（Caitlín Ní Uallacháin） には、 Síle Ní Ghadhra, Cait Ní Dhuibhir, Móirín Ní Chuileannáin などといった変名がある。これらは時代状況に合わせて詩人達によってさまざまに変容させられていったものであるが、八世紀末の作と推定されるゲール古話『エンガスの夢』（*Aishlinge Oenguso*）にその祖形となるものを求めることができる。その物語は、アイルランド神話上の種族であるデ・ダナーン族のエンガスが、夢に美しい乙女を見て恋の病に罹る。ようやく探し当てた彼女は、やはりデ・ダナーン族のコノハト王の娘であり、一年ごとに人間と白鳥にその姿を変えるという身の上にある。遂に湖上で娘の姿を認めたエンガスは、翌年に白鳥の姿となった彼女と再会し、自らも白鳥に変身し二人で飛び去っていくというものである[91]。『エンガスの夢』は、「アシュリング」（aishling：「幻想」または「夢」の意）というゲール文学の一ジャンルに発展する先駆的な作品であり、初期のものはこの話にあるように、王と恋の不在とを絡み合わせた主題のものであった。十七世紀になって、ウィリアム

戦争とカトリックへの刑罰法が制定される状況において、アシュリングはジャコバイトの復権やカトリックの政治的解放の希望を表現するものに変化していく。その期待を促進するメッセージを運ぶ女性ペルソナは「スペアーヴァン」（spéirbhean＝sky-woman）とも呼ばれるが、その一人が L. D. オヘファーナン（Liam Dall ÓhIfearnáin,c. 1720–1803）の創作した Caitlín Ní Uallacháin（キャサリーン・ニ・フーリハン）であった。アシュリングは、十八世紀に主にマンスターの詩人達によって政治的な主題を伏在させた作風で全盛を迎える。そして、これまでの主題を含みにして E. R. オサリバン（Eoghan Rua Ó'Súilleabháin, 1748–1784）によって、その代表作である'*Ceo Draíochta*'（*Magical Mist*）に典型的にみられるような形式に整えられていく。彷徨する詩人がこの上もない美しい妖精の女に出会うが、その名を聞いてみると婚約者に捨てられたアイルランドであるということが判明する。そして、女は正統な権利を持つ婚約者である王が復位するということを予言して消えていくといった形式となる[(92)]。このようなテーマは、実際に過酷な刑罰法に喘ぐカトリックが、共通に抱いた渇望を表わしたもので、1798年のユナイテッド・アイリシュマンの蜂起に想像的な刺激を与えるものとなっていく。このようにジャコバイト詩人達（Jacobite poets）の作品には、何気ない表面の趣向とは異なって、その裏にスチュアート王家の帰還と王位回復を予告するテーマを潜ませるという特徴がある。例えば、E. オライリィ（Aogán Ó Rathaille, c. 1675–1729）の'*Mac an Cheannaí*'（*The Merchant's Son*）は、典型的なアシュリングに則って夢の中に見る女性の場面から始められ、

Her mouth so sweet, her voice so mild,

I love the maiden dearly,
wife to Brian, acclaimed of heroes
—her troubles are my ruin !
Crushed cruelly under alien flails
my fair-haired slim kinswoman:
she's a dried branch, that pleasant queen,
till he come, her *Mac an Cheannaí*.[93]

と続いていくが、海の向こうからやって来るだろうと期待される「商人の息子」とは、ジェイムズ2世の息子で「老僭称者」(the Old Pretender) と俗称されるジェイムズ・F・スチュアートのことを指すものとされる。また、詩人が恋する女性を通してアイルランドを讃えるといったように、一見無害な恋愛歌と読めるものが、英国軍の捜索するなかを逃れてきた恋人を密かに匿う娘に変身することを希求する詩となるものもある。キャサリーン・ニ・フーリハンは十九世紀になって、アイルランド・ナショナリズムの意識を明瞭に担わされていくことになる。マンガンの詩「キャサリーン・ニ・フーラハン」(*Kathaleen Ny-Houlahan*) では、'Saxoneen' という語によって、彼女がイギリスからの解放者であることが明示されている。

マンガンの作品においても、本来は美しいキャサリーン・ニ・フーラハンが「亡霊みたいな老婆」の現況にあると語られているのであるが[94]、重要な伝統的アレゴリーの一つとしてアイルランドを女性 (特に老女) として見立てるものがある。一般に自国を女性に擬えることはどの国にもあるごく普通の現象といえるのだが、他国よりもこのテーマの頻出が際立って著しいアイルランドでは、それが文学的な意匠をもは

や超えるものとなっている。アイルランドでのこの例の最も早いものが、九世紀頃の作とされる『ベアの老女』（*Caillech Bérri: The Old Woman of Beare*）である。今は痩せ老いさらばえて尼に身を窶した主人公が、王侯貴族と遊んだ若かりし頃を懐かしむもので、生の無常を歌った作品である。やはり「貧しい老婆」を意味し、アイルランドの変化である「シャン・ヴァン・ヴォホ」（*Shan Van Vocht*）は、英語で書かれたほとんどの詩に例外なく政治的意味を担って登場し、新しい事件が起こるたびに絶えず変奏されてきたバラッドである。その最も良く知られている作は1797年に遡るものであるが、その出だしの箇所を引用してみると、

Oh ! The French are on the sea,
　Says the *Shan Van vocht*,
The French are on the sea,
　Says the *Shan Van vocht*;
Oh ! The French are in the bay,
They' ll be here without delay,
And the Orange will decay,
Says the *Shan Van vocht*.
　　Chorus
Oh ! The French are in the bay,
They' ll be here by break of day,
And the Orange will decay,
　Says the *Shan Van vocht*.(95)

このように始められている。この詩がテクストとして印刷されたのは、

1842年の『ネイション』紙に掲載されたものが最初であって、御覧のようにユナイテッド・アイリシュマンの反乱のときに援軍として到来する、フランス艦隊のことがあからさまに言及されている。D. オサリバン（D. O'Sullivan）によると、「シャン・ヴァン・ヴォホ」という名は当時の諧謔詩から借用されたものであり、B. メリマン（Bryan Merryman）の『真夜中の裁判』（*The Midnight Court*）のなかでも触れられているように、その内容も金持ちの老女と結婚する若い男のこと歌ったものであった[96]。このように「シャン・ヴァン・ヴォホ」は元々政治的な係わりがなかったものが、時代背景によって‘緑色’に着色され、アイルランドの象徴としての虐げられた「みすぼらしい老婆」としてその姿を現す。そして母国のために若者達がその命を賭して戦うときに、若く美しい女性「スペアーヴァン」として復活するのである。1790年代以前にはアイリシュとアングロ・アイリシュ共々の文学にはそのようなアレゴリカルな概念はなんら含まれてはいなかったのであるが、ナショナリズムの高揚期に「シャン・ヴァン・ヴォホ」は国民の愛国心を掻きたて犠牲的精神をもって戦うことを礼讃するために、文人達によって老女から変貌した「美しい処女」（母国アイルランド）として描かれるようになる。このようなナショナリズムの潮流のなかにあって、イェイツとグレゴリーの合作劇『キャサリーン・ニ・フーリハン』も、当然ながらその末尾に置かれる作品となる。そこで問題となるのは、ナショナリズムは擁護すべき文化がなければ存立しえないが、その不人気のゆえに政治的ナショナリズムは擁護しようとする文化をしばしば理想化し、時には虚偽化するということである[97]。アイルランドのナショナリズムを振り返ってみると、人々はこの大衆的理想化によってしばしば苦しめられてきた歴史をもつ。真理や神意を宿す国家のために戦うとい

う信念によって、血気に逸る青年達の多くの命が犠牲となったのであるが、イェイツの『キャサリーン・ニ・フーリハン』を、ここで再びアイルランド現代史のなかに投入してみよう。

アイルランドの「自治法」案件を、自身の最後の仕事であると感じていたグラッドストーンは、四度目の政権の座に返り咲くと、早速、第二次法案（1893年）を提出するが、庶民院は通過したものの、貴族院ではあっさりと葬られてしまう。グラッドストーンの死後、アイルランドに自治権を与えることを公約していた自由党は、アスキス内閣のときに（1912年）第三次法案を提出し庶民院を通過させる。これで法案の庶民院通過は三度目となるが、このことが大きな意味を持っていた。というのは、これに先立つ三年前に議会は、庶民院で三度継続して通過した法案は、貴族院の承認がなくても二ヵ年経つと自然成立すると決議していたからである。1914年に二年前に庶民院を通過していたアスキスのアイルランド第三次自治法が自動的に成立した。しかしながら、法案成立の前月に第一次大戦が勃発していたので、自治法案の施行は戦争終結まで延期されることになった。このような経過のなかで、1916年の四月の復活祭の翌日に、パトリック・ピアス（Patrick Pearse）を指揮官とする「アイルランド義勇軍」（Irish National Volunteers）の一部のナショナリスト過激派（I. R. B.）が、無謀なクーデターを企て、「アイルランド暫定共和国」（Irish Provisional Republic）の樹立を宣言するのである。1200名が参加したといわれるこの蜂起は、450名の死者と約2500名の（多数の市民を含む）負傷者を出して一週間で鎮圧される。無条件降伏したピアスはじめとするこの騒乱の指導者十六人は、銃殺刑という過酷な運命に晒されることになる。初め事件に無関心であった人々の同情が、即決裁判によって次々と処刑されていった若者達に次第に集まるようになっ

ていった。彼等はその死によって神話化され或る意味で殉教者に祭り上げられていくことになるのだが、「恐ろしい美が生まれた」（‘A terrible beauty is born.’）と歌うイェイツの詩も、この神話化を促進したものとすることができよう。しかしこの事件について、イェイツは晩年の詩「人と谺」（‘*Man and the Echo*’）で、

MAN

In a cleft that’s christened Alt
Under broken stone I halt
At the bottom of a pit
That broad noon has never lit,
And shout a secret to the stone.
All that I have said and done,
Now that I am old and ill,
Turns into a question till
I lie awake night after night
And never get the answers right.
Did that play of mine send out
Certain men the English shot ?
Did words of mine put too great strain
On that woman’s reeling brain ?
Could my spoken words have checked
That whereby a house lay wrecked ?
And all seems evil until I
Sleepless would lie down and die.

ECHO

Lie down and die.[98]

と回顧するのであるが、ここにある「私の戯曲」（that play of mine）とは『キャサリーン・ニ・フーリハン』のことを指しており、心逸る「或る者達」（Certain men）とはイースター蜂起で虚しく散っていった若者達に他ならない。アルトという洞穴の巨石の前で夜も眠れない「人」は、「倒れ死ぬ」（lie down and die）まで、このことの疑念が解けないと煩悶する。「谺」は無常にも「倒れ死ぬ」と繰り返すだけである。イェイツの多くの詩は力強い主張で始まるのが最後に自問自答で終わることがある。この矛盾がイェイツの‘半ば言われた事柄’という暗示性を生み出すのであるが[99]、この詩においても読者はその回答を肝心の詩に求めることができずに、自身で考え出さなければならないということになる。

終りに

イェイツの判断は、パーネルの失脚後の政治空白が、アイルランドのナショナリズムが政治的なものから文化的なものにその場を明け渡す好機となるというものであった。このように始められた文芸復興であったので、運動の目的は確かにナショナルなものではあったが、イェイツをはじめとするプロテスタント・アセンダンシーの出自の文芸復興派が、決して真のナショナリストになることはなかった。ロマン主義はアイルランドでは依然として残存していたが、神話や伝説を題材に選んだ彼等の詩や劇は、J. M. シング（John Millington Synge）の「プレイ・ボーイ

事件」の場合に認められるように、殆んど現実のアイルランド世界を描くものではなかったのである。しかしながら国民文学の果たす機能には、自らの国家を解釈・定義し世界に知らしめるという目的があった。これらをもって、彼等が宗教をはじめとするアイルランドの大多数の人々の諸事情を理解していなかったことの説明となるかもしれない。再言することになるが、十九世紀の後半ナショナルな政治機運が高まるなか、勃興しつつあるカトリック・ナショナリスト階級は、自らを正当化してくれる歴史的シンボルを必要としていた。これを彼等に供給することが、アングロ・アイリシュのアセンダンシーの役割となった。平たく言えば、彼等はせっせと自らの墓穴を掘っていたことになる。R. ウィリアムズによれば、支配的多数派と袂を別った上流階級の一部の行動として、良心の問題として下層階級と手を結ぶことがあるが、個人的な義務感を抱いて手を差し伸べるだけであって、連帯することでもなく連携するわけでもないといったことがある[(100)]。文芸復興を支えるアングロ・アイリシュの背後にもこの態度が潜んでいたのであるから、自業自得と言ってしまえば少々酷な言葉となろうか。D. コーカリィーは、イェイツを含むアセンダンシーの作家達は、アイルランドのカトリックの経験における三つの大きな要素―宗教、ナショナリズム、土地―に無感覚であったと述べている[(101)]。従って、（シングはともかくとして）彼等はアイルランド語を話すことも読むこともなかったのである。コーカリィーはまた、イェイツはシングに「十八世紀、いやそれよりもっと前の時代の決闘好きな者達や学者達に原型をとる古きアイルランド」が残るアラン島を尋ねるように勧めたのであるが、それがそもそもの誤りであったと指摘している。このことは現在のイェイツ批評に繰り返されるテーマ、つまりイェイツはアイルランド歴史、十八世紀、ゲールの伝統を

誤解していたということに逢着する。しかしながら、文芸復興に見切りをつけ始めた頃に、イェイツは既にこのことには気づいていたようにも思われる。『瑪瑙の彫琢』のなかで、イェイツは自分のせっせと奉仕する理想のアイルランドは、これから以後は*想像上*のアイルランドとなるであろうが、多くの基本点で二人の人物（オリアリーとJ. Fティラー）の描いたアイルランドの姿と共通している、と明言しているからである。そのアイルランドの姿とは、プロスタント・アセンダンシー全盛のグラタン（Henry Grattan, 1764–1820）の時代によって築かれたそれであり、あるいは、マツッーニ（Giuseppe Mazzini, 1805–1872）や十九世紀のヨーロッパの革命家達の理想主義を貫いたデイヴィスの世代が築いた人生やナショナリズムのそれであると語っているのである[(102)]。しかしながら、例えば「グラタン議会」（Grattan's parliament, 1782–1800）の農本主義の時代を、領主と農民とが友誼的な関係が維持される理想的なものと、イェイツは‘誤解’していたことも付言しておかなければならない。

アイルランド文芸復興運動は、文化を宗教の代替物と考えたという意味において、確かにアーノルド的であった。イギリスで教養に基づくアーノルド流の文化が受容されなかったのは、階級間に対立があったために、そこで語られる文化が特定の階級を対象にして語られるものであったからである。従って、文化はアイルランドのような植民地条件において受容される機宜を得るのであり、文化こそが異邦人である支配者に対して植民地人が対抗すべく共有する手段となった。アーノルド流の文化に賛意するイェイツの属するアングロ・アイリッシュは、自分達が歴史のなかから放擲されようとしている正にその瞬間に、文化を武器に窮余の反抗を試みたのだといえよう。イェイツにあっては、あるときはアイ

ルランドの古代神話や神智学や怪しげな魔術のなかに、またあるときは存在することが終ぞなかったアイルランドの伝統のなかに、歴史の全体像を再現しようと試みた。本稿の始めで触れたように、イェイツらの文芸家は文芸復興における作品の素材として、オグレイディの翻訳したクフーリン伝説をもっぱら取上げたのであるが、クフーリンは一般民衆の抱く英雄像のモデルとなっていったのである。英国人から野卑で無知な故に自己統治の能力に欠如していると決めつけられ、常に英国によって庇護されなければならないか弱い女性的なイメージとして捕らえられていたアイルランド人にとって、クフーリンは男性的なもののシンボルとして*創造*され出現することになった。

（かわかみ　たけし・北海学園大学教授）

［註］

（1）ケドゥーリー, E.『第二版　ナショナリズム』小林正之　他訳（学文社、2003年）, 68.

（2）O'Grady, Standish James, *History of Ireland: The Heroic Period, Vol. 1* (London, 1878), v. Nabu Public Domain Reprints

（3）*Ibid*., x.

（4）O'Grady, Standish James, *History of Ireland: The Heroic Period, Vol. 2*, (London, 1880), 17. Nabu Public Domain Reprints 1880年に発表された *Early Bardic Literature* は直ぐ後にこの本の巻頭に所載された。

（5）O'Grady, *History of Ireland: The Heroic Period*, *Vol. 2*, 261–2.

（6）Deane, Seamus. ed., *The Field Day Anthology of Irish Writing Vol. II*, (Derry, Field Day Publications, 1992), 525.

（7）*Ibid*., 252.

（8）*Ibid*., 526.

（9）Yeats, William Butler, *Autobiographies*, (London: Macmillan, 1970), 219–21.

(10) Yeats, William Butler, *Essays and Introductions*, (London: Macmillan, 1961), 260.

(11) Alspach, R. K. ed., *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats*, (London: Macmillan, 1966), 957.

(12) イーグルトン, T.『学者と反逆者　19世紀アイルランド』大橋洋一/梶原克教訳（松柏社、2008), 55.

(13) Yeats, *Essays and Introductions*, 173.

(14) *Ibid*., 174.

(15) Arnold, Matthew, *On the Study of Celtic Literature and on Translating Homer*, (New York : Macmillan, 1907) Kessinger Publishing's Reprints

(16) *Ibid*., xi.

(17) *Ibid*., 74–5.

(18) *Ibid*., 76–7.

(19) *Ibid*., xiv.

(20) *Ibid*.,

(21) *Ibid*.,137.

(22) *Ibid*., 9–10.

(23) マレー, N.『マシュー・アーノルド伝』村松眞一訳（英宝社、2007年), 307.

(24) Arnold, *On the Study of Celtic Literature and on Translating Homer*, xix.

(25) マレー, N.『マシュー・アーノルド伝』, 308.

(26) Arnold, *On the Study of Celtic Literature and on Translating Homer*, 102–3.

(27) Yeats, *Essays and Introductions*, 185.

(28) *Ibid*., 186–7. このあとで、イェイツが R. ワーグナーについて特に言及しているのが興味深い。十九世紀中期に盛んに発表されていたスカンジナビア（北欧神話）の『エッダ』（*Edda*）をモチーフとしたその楽劇は、正しくゲルマン民族意識の形成と高揚に寄与するものであった。

(29) Kohn, Hans, *The Idea of Nationalism A Study in Its Origins and Background* (New Brunswick & London : Transaction Publishers, 2008), 5. および579. の注を参照。

(30) ボブズボーム, E. J.『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫ほか訳（大月書店、2004年), 17–8.

(31) ゲルナー, E.『民族とナショナリズム』加藤節　監訳（岩波書店、2007年), 1.

(32) ゲルナー, E.『民族とナショナリズム』, 207–9.

(33) ルナン, E.「国民とは何か」『国民とは何か』鵜飼哲也訳（インスクリプト、1997年）, 所収。47.

(34) ゲルナー, E.『民族とナショナリズム』, 212.

(35) ケドゥーリー, E.『第二版　ナショナリズム』小林正之　他訳（学文社、2003年）,「第二章　自決権」を参照のこと。

(36) ケドゥーリー, E.『第二版　ナショナリズム』, 80.

(37) アンダーソンはナショナリティ（nationality）の代わりにネイションネス（nationness）という新語を用いている。

(38) Anderson, Benedict, *Imagined Community : Reflection on the Origin and Spread on Nationalism*, Revised Edition, (London : Verso, 2006) , 5–6.

(39) *Ibid*., 24–25.

(40) このことはケドゥーリーの『第二版　ナショナリズム』によっても指摘されているところである。

(41) Anderson, B., *Imagined Community* , 143–5.

(42) ボブズボウム, E. J. & レンジャー, T.『創られた伝統』前川啓治　他訳（紀伊国屋書店、2007年）, 17.

(43) ボブズボーム, E. J.『ナショナリズムの歴史と現在』, 14–5.　ボブズボームは前近代のプロ・ナショナリズムと近代ナショナリズムの自動的な連続性には疑問を投げ掛けている。慎重にも彼はこの関係を連続性よりも接続性という見地から分析している。

(44) Smith, A. D., *National Identity*, (Las Vegas: Nevada U. P., 1991) , 73.

(45) Smith, A. D., *The Ethnic Origins of Nations*, (Oxford: Basil Blackwell, 1999) , 25.

(46) ボブズボームの proto–nationalism（「前近代的ネイション意識」）という語にたいして、アンダーソンは ethnicity という語を使用している。

(47) 以下のスミスのナショナリズム論は、主に *National Identity* の第３章‘The Rise of Nations’に負っている。

(48) Smith, A. D., *National Identity,* 65.

(49) しかしながら現実は、Eagleton も *Heathciff and the Great Hunger*, (London & New York: Verso, 1995) のなかで指摘しているように、アイルランドでは自然は決して美的知覚の対象とされることはなかったのである。そこでは、自

然はあまりにも社会的、物質的な対象―地代、土地の転貸しひいては馬鈴薯の収穫―なのであり、一定の距離から眺めて主題化することのできないものであった。

(50) Kohn, Hans, *The Idea of Nationalism A Study in Its Origins and Background* で検討されているイギリスやフランスの‘civic’な Western nationalism と、それに対するドイツを代表とする‘ethnic’な Eastern nationalism であるが、特に第７章の‘Stirrings in the Old World’を参照。なお使用した、Transaction 版には C. カルフーンによる『序文』が所載されているが、コーンのナショナリズム論をそのシオニズム活動の観点からの解説・紹介したものともなっている。

(51) この分析については、スミスの *National Identity* の第６章‘Separatism and Multi-nationalism’による。

(52) Beckett, J. C., *The Anglo-Irish Tradition*, (London: Faber & Faber, 1976), 60.

(53) Eagleton, Terry, *Heathcliff and the Great Hunger*, 92-3.

(54) Duffy, J., ed., *The Spirit of the Nation, Ballads and Songs by The Writers of "Nation"*, (Dublin: J. Duffy, 1845), Kessinger Publishing's Reprints 39.

(55) 青年アイルランド党が、ピール政府による「クイーンズ・カレッジ」(Queen's College) の創設をめぐってオコンネルと対立し、最終的に「リピール協会」を離れるのが1846年である。

(56)『ネイション』紙については当局の圧力によって1848年に廃刊に追い込まれた後に、*The United Irishman, The Irish Tribune, The Irish Felon, The Irishman* といったものが次々と発刊されるが、いずれも短命に終わる。1849年から再刊される『ネイション』第二シリーズはかなり穏健な論調となる。

(57) Deane, S., *The Field Day Anthology of Irish Writing Vol. II*, 53-4.

(58) Porter, R. & Teich, M., ed., *Romanticism in National Context*, (Cambridge U. P., 1988), Dunne, T., 'Haunted by History' 78.

(59) アイルランドの他のラディカルな集団と同様に、青年アルランド党も全般に見てかなり保守的だったという説明がよくされる。Cronin, S., *Irish Nationalism*, (New York : Contiuum, 1981), Zimmerman, G. D., *Songs of Irish Rebellion*, (Dublin : Four Court Press, 2002), イーグルトン, T.『学者と反逆者』など。

(60)『国民の精神』の1845年版に掲載されたバラッド147編のうち、ディヴスのものが44篇と飛び抜けて多く、ダッフィのものも10篇を数える。

(61)『国民の精神』の編者の D. Duffy は C. G. Duffy とその姓が同じであるが、血縁関係はないことを付け加えておく。

(62) Duffy, J., ed., *The Spirit of the Nation*, v.

(63) *Ibid*., 3.

(64) *Ibid*., 159–60.

(65) このすぐ後で引用されるマンガンの‘*Dark Rosaleen*’と比較するために、ファーロング訳の‘*Róisín Dubh*’での相当連を示す。

Oh ! My sweet rose, cease to pine for the past,
For the friends that came eastward shall see thee at last;
They bring blessings and favours the past never knew
To pour forth in gladness on my Róisín Dubh.

The mountains, high and misty, through the moors must go,
The rivers shall run backward, the lakes overflow,
And the wild waves of old ocean wear a crimson hue,
Ere the world sees the ruin of my Róisín Dubh.

(66) Kennelly, B., *The Penguin Book of Irish Verse*, (Penguin Books, 1981), 149.

(67) Zimmerman, G. D., *Songs of Irish Rebellion Irish Political Street Ballads and Rebel Songs, 1780–1900*, (Dublin: Four Court Press, 2002), 86.

(68) Kennelly, B., *The Penguin Book of Irish Verse*, 196.

(69) Porter, R. & Teich, M., ed., *Romanticism in National Context*, Dunne, T., ‘Haunted by History’, 83–4.

(70) Robert, W., ed., *The Oxford Companion to Irish Literature*, (Oxford : Clarendon Press, 1996), 23.

(71) Nairn, Tom, *Faces of Nationalism* : Yanus Revisited, (London・New York : Verso, 1997), 110.

(72) Robert, W., The *Oxford Companion to Irish Literature*, 245–6.

(73) Beckett, J. C., *The Anglo–Irish Tradition*, 149.

(74) Eagleton, T., *Heathcliff and the Great Hunger*, 250–1.

(75) *Ibid*., 249.

(76) Yeats, *Essays and Introductions*, 246.

(77) Yeats , *Autobiographies*, 19–20.

(78) *Ibid*., 20.

(79) *Ibid*., 94.

(80) イェイツの『自伝』での記述では、オリアリーは五年の懲役刑を勤め、その後十五年の亡命生活を送ったとなっている。

(81) Brown, Malcolm, *The Politics of Irish Literature from Thomas Davis to W. B. Yeats*, (London: George Allen & Unwin, 1972), 8.

(82) *Autobiographies* の「デイヴィスと青年アイルランド党員の筆になる詩集」がオリアリーからイェイツに手渡されたという箇所であるが、恐らく『国民の精神』と思われる。

(83) Zimmerman G. D., *Songs of Irish Rebellion*, 48.

(84) Yeats, *Essays and Introductions*, 257.

(85) Zimmerman G. D., *Songs of Irish Rebellion*, 82–3.

(86) Yeats, *Essays and Introductions*, 256.

(87) Yeats, *Autobiographies*, 204–5.

(88) Alspach, R. K. ed., *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats*, 234–5.

(89) 杉山寿美子『アベイ・シアター　1904–2004　アイルランド演劇運動』(研究社、2004年), 74.

(90) Yeats, W. B., *Collected Plays of W. B. Yeats*, (London: Macmillan, 1977), 86.

(91) イェイツの初期の叙情詩の秀作‘*The Song of Wandering Aengus*’はこの作品の影響がある。

(92) Robert, W., *The Oxford Companion to Irish Literature*, 272–3.

(93) Deane, Seamus., *The Field Day Anthology of Irish Writing Vol. I*, 292. なおこの英訳は Thomas Kinsella のものである。

(94) マンガンの‘*Kathaleen Ny-Houlahan*’の二連目を Kinsella, Thomas, ed., & Trans., *The New Oxford Book of Irish Verse*, (Oxford U. P., 2001) から引用してみる。

Think her not a ghastly hag, too hideous to be seen,
Call her not unseemly names, our matchless Kathaleen;
Young she is, and fair she is, and would be crowned a queen,

Were the king's son at home here with Kathaleen Ny-Houlahan !

(95) Kinsella, Thomas, ed., & Trans., *The New Oxford Book of Irish Verse*, 252.

(96) Zimmerman, *Songs of Irish Rebellion*, 56.

(97) Hunt, Hugh., *The Theatre and Nationalism in Ireland* (Swansea: Wales U. P., 1975), 9.

(98) Yeats, W. B., *Collected Poems of W. B. Yeats*, (London: Macmillan, 1969), 393-4.

(99) MacNeice, Louis, *Poetry of W. B. Yeats*, (London: Faber & Faber, 1947), 47. イェイツの詩のこの特徴は、Kiberd, D., *Inventing Ireland*, (London: Vintage Book, 1996) の chapter 7 'The National Longing for Form' でも取り上げられている。

(100) Raymond, William, *Problems in Materialism and Culture*, (London & New York :Verso, 1996), 149.

(101) Allison, Jonathan. ed., *Yeats's Political Identities*, (Michigan U. P., 1996), 'Introduction Fascism, Nationalism, Reception', 13.

(102) Yeats, *Essays and Introductions*, 264.